

穴道町ふるさと文庫5

穴道町の山城



目 次

1. はじめに	1
2. 山城とは何か	2
1) 近世城郭と山城	2
2) 山城の発達	7
(南北朝期の山城)	7
(根小屋式山城)	9
(戦国期の山城)	12
3) 山城の築城	23
3. 宍道要害山城の縄張りについて	27
1) 地取り	27
2) 縄張り	28
3) 普請	32
4. 佐々布要害山城の縄張りについて	34
1) 地取り	34
2) 縄張り	37
3) 普請	40

5. 金山（坂口）要害山城の縄張りについて	43
1) 地 取 り	43
2) 縄 張 り	44
3) 普 請	49
4) 水 の 手	52
6. むすびにかえて	58
1) その他の山城遺構	58
2) 縄張り調査のすすめ	61
附. 金山要害山を語る会とその活動	65

表紙の写真は坂口側よりのぞむ金山（坂口）要害山城

1. はじめに

私たちの宍道町には、要害山^{ようがいさん}とよばれる山が三か所あることをご存じでしょう。宍道駅の西側で、児童公園となっている宍道の要害山と、54号線沿いの佐々布^{さそう}の要害山と、金山と坂口の間の丘陵にある金山の要害山（坂口要害山ともいわれますが、ここでは金山要害山とよぶことにします）の三つです。要害山という山名は他町村にもしばしば見られ、かなりありふれた地名となっています。

岩波書店『広辞苑』の「要害」の項には、「①地勢^{けんそ}險阻で、敵を防ぎ味方を守るに便利な地 ②とりで、城塞^{じょうさい} ③防備、用心」とあり、小学館『日本国語大辞典』によれば、「要害」とは「味方にとっては要で、敵にとっては害となるの意」として「①地勢がけわしく、守りやすく攻めにくい所 ②転じて①のような地点に築いた城塞。とりで。要塞^{ようさい}。またその防備」とあります。

たしかに、各地の要害山とよばれる山には、例外なく山城^{やましろ}として使用された痕跡^{こんせき}が認められます。つまり、ある時期にその山が山城として利用されると、後世、もともと無名だった山や別名をもっていた山までもが「要害山」と名づけられることが多いのです。もちろんそのものズバリ「城山」、あるいはそれが訛^{なま}って「ジャヤマ」（さらに転じて「蛇山」など）とよばれる場合もあります。ただ、東北地方では「ヨーガイ」という地名は、谷底・三角洲・山麓・海岸など低地にもあり、警戒を要する交通上の要地の意味に使われているようです。

では宍道町の三つの要害山の場合はどうでしょうか。くわしくは後に紹介しますが、どの要害山にも明瞭に山城^{めいりょう}としての特徴が残されており、間違いなく山城遺跡とすることができます。しかも幸いなことに保存状態がよいですから、貴重な文化財としての認識を深めるとともに、活用する方法もまたみんなで考えていくべきでしょう。

2. 山城とは何か

1) 近世城郭と山城

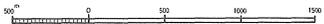
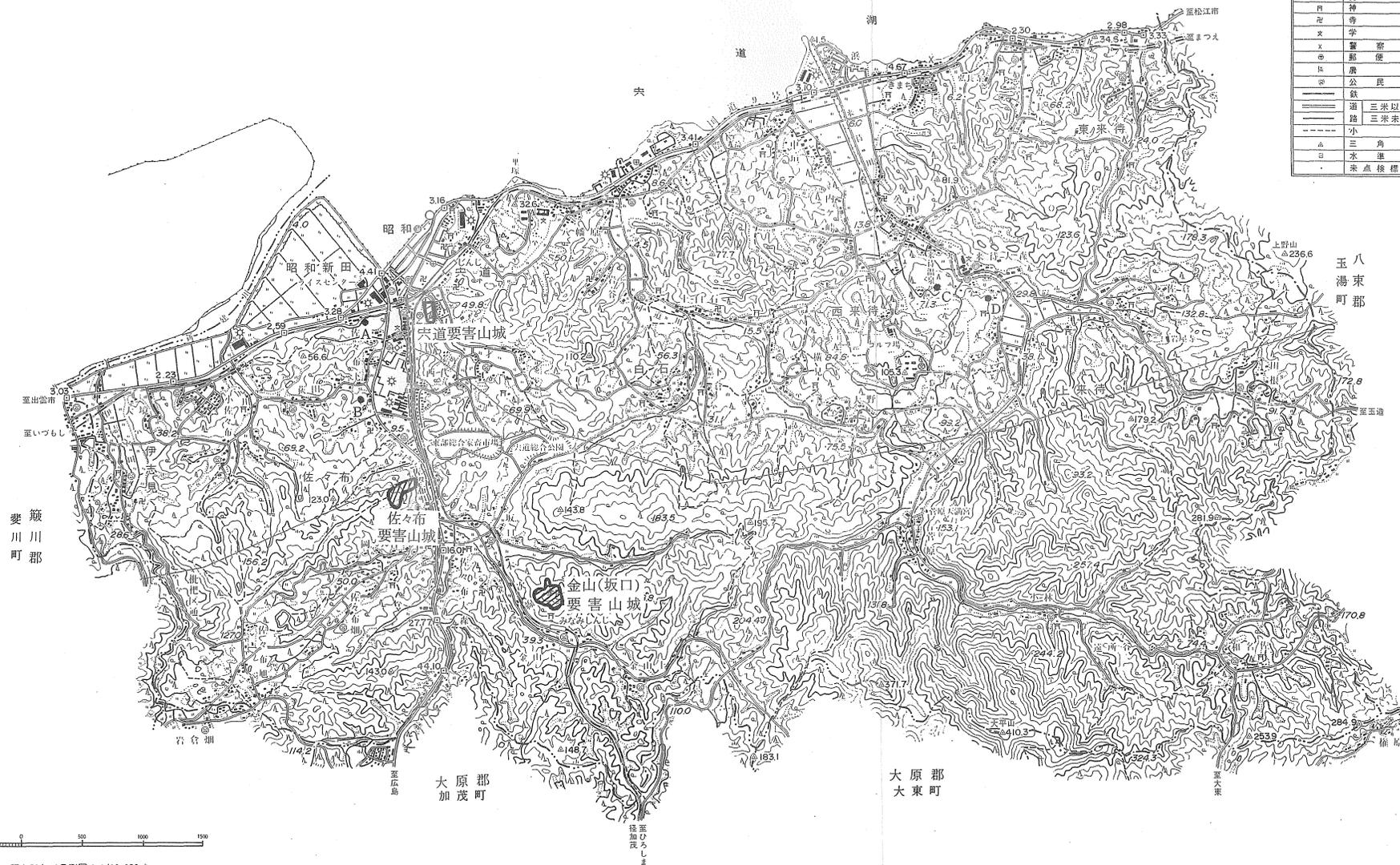
さて「城」といった場合、皆さんはただちに松江城あるいは姫路城・大阪城などを連想されると思います。つまり白亜^{はくあ}の天守閣と多数の櫓^{やぐら}、延々と続く塀^{こけ}と苔むした弓なりの高い石垣、そして松の緑を映した深い水濠^{みずぼり}などが「城」の一般的なイメージとなっています。しかしこうした城は、徳川家康が発布した一国一城令によって近世大名の居城^{きよじょう}とされた、いわゆる「近世城郭^{きんせいじょうかく}」とよばれるものです。

「近世城郭」は、単に軍事施設というに加えて、城主やその一族の居住施設であり、さらに藩内を治めていくための政庁といった機能が重視され、人々に城主の威厳^{いげん}を示すことまでもが求められた結果築かれた城なのです。空高くそびえる天守閣には、特にそうした城主の威光を示すための象徴的あるいは政治的な役割があるわけです。

本格的な天守閣が初めて出現したのは、織田信長が築いた安土城^{あづちじょう}からです。五層七重の天守閣は天正七年（1579）に完成し、本能寺の変



凡 例	
記号	説明
◎	後場
○	支所
㊦	神社
㊧	寺院
×	学校
×	警察署
㊨	郵便局
㊩	農協
㊪	公民館
—	道
—	三米以上
—	三米未満
—	小径
△	三角点
□	水準点
.	標高



本図は、昭和59年12月測図の1/10,000を縮小し編集したものである。

地図1 宍道町の山城

で信長が死んだ後まもなく焼け落ちたので、現実にはそびえていたのはわずかな期間でしかないのですが、それ以後の城郭建築に大きな影響を与えました。後をついだ豊臣秀吉は、大阪城・伏見城・^{じゅうらくだい}聚楽第など大規模な城をつぎつぎ築きましたが、いずれも雄大な天守閣をもつ城郭でした。

織田信長や豊臣秀吉とそれぞれの配下の武将たち（これを織豊系^{しよくほうけい}大名とよびます）は、これ以前にもほかの戦国大名たちとの戦いのために各地に多くの城を築きますが、ある時期からはほかの戦国大名のそれときわだった違いをもった城郭を築くようになります。つまり彼らは、永禄十年（1567）以降に、石垣と礎石・^{かわらぶき}瓦葺^{そせき}建物を一体として



写真1 松江城天守閣

備えた城郭を築き始めたのです。

すでにこの頃には、野戦でも城攻めにおいても、鉄砲が多数用いられるようになりました。こうなると、簡単な楯たてや柵さくあるいは板壁いたかべ程度では防ぎきれなくなり、建物には、防御を強固にするために厚い塗ぬり込こめの土壁つちかべがめぐらされるようになり、その重量を支えるために礎石すを据えてその上に柱を立てた、本格的な建築物が造られるようになってきました。そして、そうした建物の耐久性を高め高層化するためには、かつてのような草葺くさぶきや板葺いたぶきでなく、瓦葺かぶきが望ましいことはいうまでもありません。と同時に、いよいよ増加するそれらの重量を支えるための土台を堅固なものとするため、石垣が導入されることになったのです。このように、織豊系大名たちの造ったいわゆる織豊系城郭の系譜をひく城郭が、私たちの「城」の一般的なイメージとなっているのです。

しかし、これまで述べたように、戦国時代の末期に急激に進歩する以前の「城」、つまり中世の山城は違います。山の頂いただきに、基本的に土造りで、建物も貧弱な、純軍事施設として造られたのが中世の「城」なのです。中世城郭を考えようとすると、国人こくじんや地侍じざむらいなどとよばれた地方の武士たちの館やかたや、環濠集落かんごうしゅうらくあるいは一部の寺院までも含めて考えなくてはなりません、ここでは山城にしぼりたいと思います。いずれにせよ、みなさんのこれまでの「城」のイメージをかなり修正してもらう必要がありますので、まず山城の発達についてみていくことから始めたいと思います。

2) 山城の発達

(南北朝期の山城)

南北朝内乱という時代（1336～1392）は、天皇家が北朝と南朝の二つの系統に分かれ、それぞれが正統性を主張して対立した時代という以上に、全国各地の武士たちが地方支配の実権をめぐる対立抗争した時代でありました。中央の権力の分裂に、地方の武士たちの抗争が結びついて離合集散をくり返し、動乱が長期化したのです。この背景には、惣領制^{そうりょうせい}とよばれる武士団の強い一族結合がくずれて、惣領家（本家）と庶子家^{しよし}（分家）の対立が激しくなったことや、農民たちが地域的な結びつきを強めて抵抗し、武士の所領支配をゆるがすようになるといった、大きな社会変動が進行していました。

すでにこれ以前に、自然の地形と組み合わせた臨時の施設として、野戦陣地の前面^{かいどう}や街道^{しゅだん}を遮断するために、堀を掘ったり木戸^{きど}を設けたり、柵^{さく}や逆茂木^{さかもぎ}を設けることが行なわれておりました。しかしこの動乱のなかで、山地にこのような防塁^{ぼうるい}や阻塞^{そさい}を造ることが始められました。と同時に、防塁や阻塞類と組み合わせた曲輪^{くるわ}が造られて陣地が構成されるようになったのです。曲輪は傾斜面^{けいせん}を削った土を低い面に盛り上げ、周囲から侵入しにくいように法面^{のりめん}（これを切崖^{きりぎし}とよびます）を急傾斜に加工した平場^{ひらば}をいいます。曲輪については後に述べるつもりですが、曲輪を主体とするところに中世城郭の特徴があります。

しかも、この時期の地方武士たちは、郡域や国境をこえた合戦に参加することが多かったので、広域の作戦にみあった高く深い山地に、

こうした諸施設を造ったのです。つまり、麓からの比高の高い、険しい独立峰を選んで山城が造られたわけです。したがって、居住性の低い純軍事施設といわざるをえません。

特に近畿地方においては、いくつもの山城が尾根の上に連なって造られ、城塞群として用いられました。有名な楠木正成の赤坂・千早城塞群などのように、尾根筋のルートを確保し、追撃をうけても山の尾根伝いに奥へ奥へと後退して抵抗する戦法がとられました。これは鎌倉時代末期から現われた、悪党とよばれた新興の武士たちのとった、いわゆる悪党戦法に適合した築城法といわれています。彼らには城を死守するという意識が薄く、形勢が悪くなると城を捨てて逃走し、体勢を立てなおして再び抵抗するといった、粘り強いゲリラ的戦法をとったのです。

したがって、個々の山城に対しても、大きな加工の手を加えてはいません。頂上部分を削平することなく残したり、削平しても粗雑な加工にとどめたままだったり、前面に堀切などの障害物を設けても、背後に対しては、自身の逃走の妨げになるような施設は設けないのが普通です。ただ、頂上付近の山腹に帯曲輪を設けるのが特徴とされています。ちょうど頭に鉢巻をしめるように、斜面をならして頂上の周囲を取り巻く細長い平場を造るわけです。この帯曲輪は、城塞群を構成する個々の山城をつなぐ連絡通路になるとともに、戦闘時にはこの縁に楯を並べて守備兵を陣取らせ、斜面を登ってくる敵兵に弓矢や石つぶてで対抗させることになるのです。

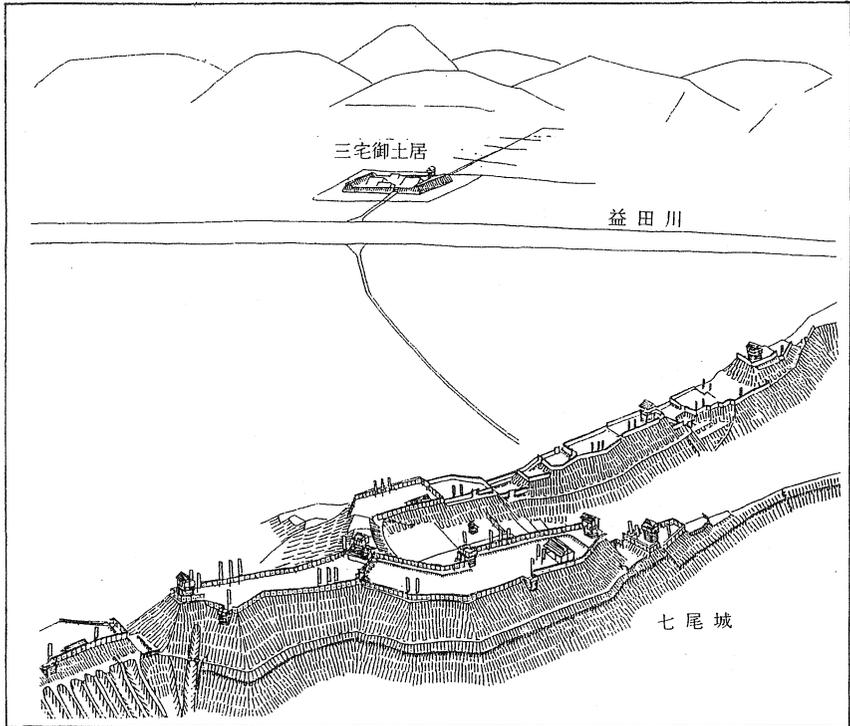
このように、南北朝期に出現した山城は、広域的な作戦に適するように、比高の高い山地が選ばれることとともに、帯曲輪による防御を重視したところに特徴を見出すことができます。

(根小屋式山城)

南北朝内乱もようやく終わり、地方の有力武士たち（彼らを国人領主とよびます）も守護大名の下に組織され、所領の支配に専念するようになると、城の造りも働きも違ってきます。守護大名の場合は領国支配の、国人の場合は所領支配の中枢として機能する城が造られるわけです。

その典型的な形は、居館の最寄りの比較的低い山上に築かれ、麓の居館とセットになった、いわゆる根小屋式山城です。東国で、居館とその集落を根小屋とよぶ用語法によってこのようによびならわしています。つまり、国人たちは平時には平地の居館に住みませんが、土塁や水堀で防備されているとはいえ、長期にわたる攻撃には弱いので、戦時には「詰めの城」とよばれる戦闘用の山城にたてこもるわけです。石見の有力国人益田氏における三宅御土居と七尾城は、この好例（付図1 七尾城・三宅御土居想像復元図参照）といえましょう。

守護大名の場合でも、守護所は一国の政治センターの役割を求められるために、どうしても軍事面では脆弱になります。そのため、守護所と戦闘用の山城がセットにされて、構築されるようになるわけです。越後国の守護所である御館（府中）と春日山城の関係はこの代表例で



付図1. 七尾城・三宅御土居想像復元図 現地調査・考証・イラストー寺井毅
三宅御土居跡を守る会『三宅御土居と中世益田氏』

あり、いくぶん疑問点もあるようですが、^{いなば}因幡国では山崎府中と^{ふたかみやま}二上山城がこの関係にあると考えられています。

詰めの城の位置は、居館に近い^{さとやま}里山が選ばれ、比高も大体100メートル程度の比較的低い山地が選ばれるようになります。ただ平時に住むのは麓の居館ですが、山城の方にも、居住施設を設けたり非常用の^{ひょうりょう}兵糧の蓄積などをおかねばなりませんから、規模も広くなり、防

御のための施設の面でも拡張され改善されてきます。

このような山城は、大きいもので一辺が20メートル程度の^{くるわ}曲輪と土^ど塁^{るい}・堀切^{ほりきり}・腰曲輪^{こしぐるわ}・柵列^{さくれつ}などから構成されるのが一般的です。城域を囲い込むために尾根筋に掘られた堀切は、延長されて^{たてぼり}堅堀となったり、堀切を重ねた^{にじゅうぼり}二重堀も用いられ始めます。

曲輪を造成するにあたっては、自然地形を^{さくへい}削平するだけでなく、削った土をさらに斜面に盛って曲輪の広さを広げたり、外部からの攻撃を^{しゃだん}遮断するために土塁を築いたりもしています。その際、出雲市^{えん}塩冶^な町^{ちやう}の大井谷^{おおいだに}城のように、人頭^{じんとうだい}大程度の石を用いて曲輪のへりに^{せきれつ}石列を築き、曲輪を補強することも行なわれています。曲輪の土塁部分以外の防備施設としては、^{さくれつ}柵列が一般的だったようです。

曲輪内の建物は、^{ほったてばしらたてももの}掘建柱建物が主流で、今のところ^{かわらぶき}瓦葺のものは確認されていません。規模はおおむね二間×三間未満で、一辺が10メートルをこえるような例は少なく、^{おもや}母屋に相当する建物はなかったようです。かまどや焼け土をともなう遺構は^{にた}煮炊きを行なった場所と考えられますが、頂上部や中心部の曲輪には存せず、腰曲輪や一段下がった曲輪に設けられていました。全体に遺物は少なく、こうした山城には、長期間居住していたのではないことがうかがえます。

このような根小屋式山城の技術的特徴は、戦国時代になってもだいたい16世紀の前半ごろまでひきつがれるようです。

(戦国期の山城)

応仁の乱に始まる戦国の争乱のなかで、伝統的な権威を誇る守護大名の多くが没落し、その地域に根をおろした実力のある地方権力が戦国大名として台頭してきます。戦国大名も彼らの家臣となった武士たちも、前に述べたような山城を、それぞれの所領に構えた有力武士たちであったことはいまでもありません。

戦国大名は一門や古くからの家臣である譜代のほか、分国内の国人や多数の地侍（なかば武士化した有力農民や土豪をさしていいます）たちを家臣団に加えます。さらに、長柄槍や鉄砲などの新しい武器が使われるようになり、平地における集団戦が行なわれるようになると、傭兵にすぎなかった足軽も常備軍に編成されるなど、家臣団はいよいよ拡大されてきます。そこで、有力家臣を寄親とし、それに一般の下級家臣を寄子として配属するなど、戦時における軍事力の編成がそのまま平時における家臣団の組織とされました。

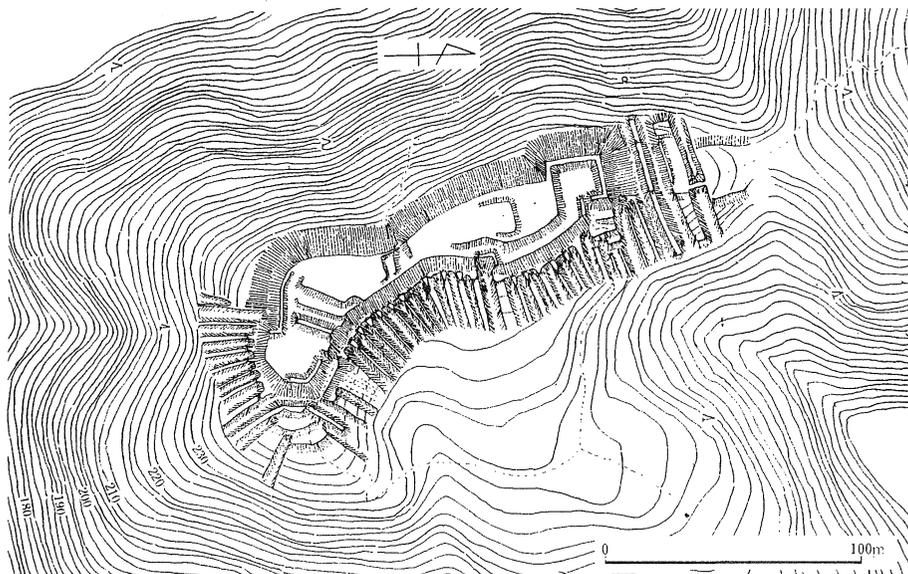
このようにして強大な軍事力をかかえた戦国大名は、それに必要な武器などの物資の生産や調達を必要としましたから、分国内の商人や手工業者を統制下におきました。また金・銀や鉄の採掘や精練技術の改良をすすめるなど、産業開発にも熱心に取り組みました。

したがって、この時期になると、軍事的な必要性はいまでもなく増大しますが、それに加えて戦国大名による民衆の動員力も増大するので、大河川の治水・灌漑工事や城下町の建設などが行なわれ、山城にも大規模な工事が行なわれるようになります。全国的には、永正年

間（1504～21）の終りから天文年間（1532～55）にかけて、戦国大名や有力国人の拠点となる本格的な山城が次々と造られ、鉄砲が広く導入される永禄年間（1558～70）に、築城術がいっそう進歩したということが出来ます。

そうしたなかで、まず空堀^{からぼり}の発達が目立ちます。これまでも、堀^{ほり}切^{きり}やそれを山腹に延長した堅堀^{たてぼり}、あるいは堀切を重ねた二重堀^{にじゅうぼり}は使われていましたが、永正末年から畝状堅堀^{うねじょうたてぼり}（あるいは畝形^{うねがた}阻塞^{そさい}ともよばれます）とよばれる空堀群が登場します。これは山腹^{くまで}を熊手^{くまで}で引っかけたような小さな堅堀の連続した施設で、この設けられる山腹は傾斜が緩^{ゆる}やかなので、畑の畝のように見えるところからこのようなよび名がつけられています。この施設は、たいていその上の曲輪からの射程距離内に造られていますので、①敵軍の山腹での横の移動^{きまた}を妨げ、②攻め登る敵軍を撃退しやすくするところから、③結果として、これが設けられなければ敵軍が足場にするであろう緩やかな斜面を使わせなくしてしまうという効果をねらった施設であります。

能義郡^{のぎくん}広瀬^{ひらせ}町の勝山城^{かつやまじょう}（付図2 勝山城縄張り図参照）の畝状堅堀群は、もっとも整然とした造りで、畝状堅堀の最盛期を示す例と考えられています。勝山城では、傾斜の緩やかな東側と南側の斜面に、計40本もの堅堀を連続して設けています。このように畝状の堅堀群を設けるねらいは先に述べたとおりですが、斜面を攻め登ろうにも堀底^{ほりそこ}にしかな居場所はないのですから、鉄砲や弓矢を用いるまでもなく、落石でも容易に撃退することができるわけです。地元ではこれを槍溝^{やりみぞ}とよ



付図2. 勝山城縄張り図（三島正之作図） 村田修三編『図説中世城郭事典 三』

んでいますが、形態面から見ても機能面から考えても、とてもうまい命名だといえます。と同時に、緩やかな傾斜面という地形のもつ弱点を、多くの人手を動員してでも堅固に強化しようという意図がありありと感じられるところです。

なお毛利元就は、永禄五年（1562）から出雲国深く侵攻して尼子氏を富田月山城に孤立させますが、その時、飯梨川の対岸の京羅木山の各地に毛利方のたくさんの陣城（付城とよぶこともあります）が築られました。陣城というのは、戦場に造られた臨時の城をいいますが、勝山城は永禄七年（1564）にその陣城群の中核として築かれ、永禄九

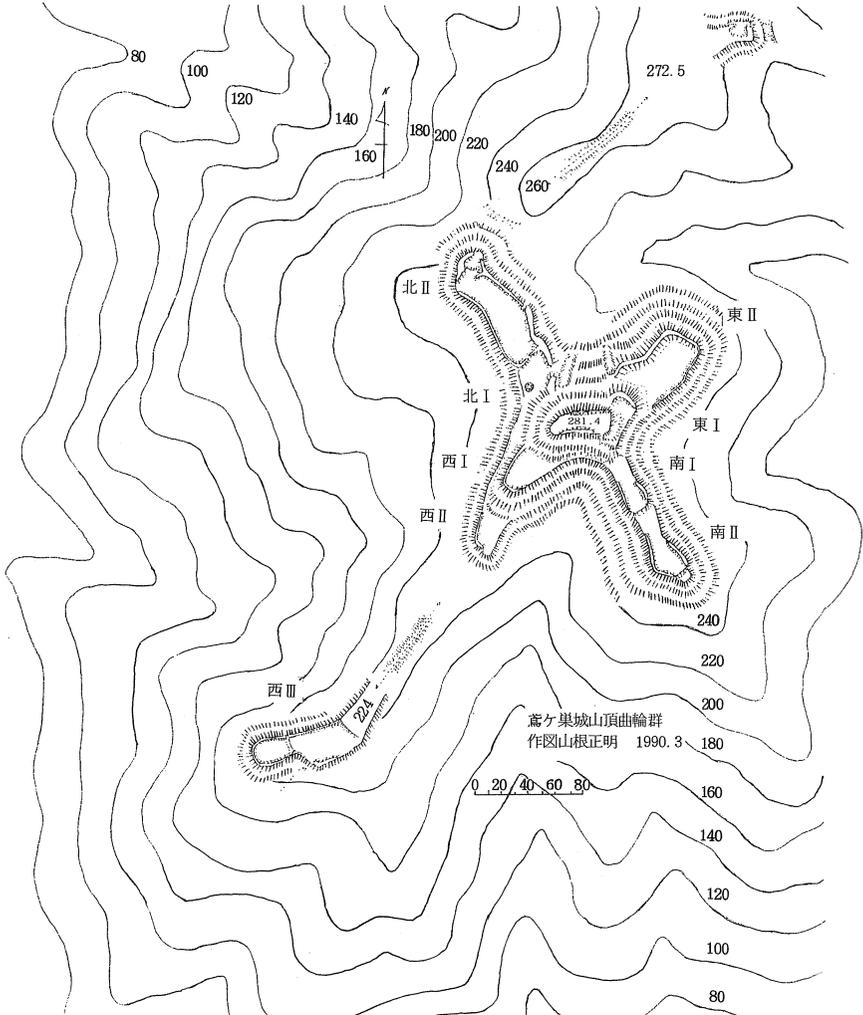
年（1566）十一月に尼子義久が富田月山城を開城するまでの本陣として利用された城です。したがって、月山城落城後は使用された可能性がないことから、この時期の毛利氏の築城技術を知るうえで非常に貴重な遺跡ということが出来ます。

畝状堅堀のほかに、緩やかな斜面の防備を強化する施設としては、腰曲輪こしぐるわを重ねる方法や横堀よこぼりがあります。横堀は堀底を連絡道としても用いられますので、山腹の遮断法しゅたんとしてはより進歩した施設であり、横堀を用いた山城は、畝状堅堀群の絶頂期である永禄期以後のものと考えられています。

この時期、土塁どるいの発達が著しいのも注目されるところです。土塁は、土を盛って築き上げ、敵兵の接近を阻はばみながら守備兵や資材・補給品などを守ろうとする施設で、土居どいとよばれることもあります。これまでも掘り上げた土をつき固め、堀切の内側に搔かき上げの土塁を設けることはされていましたが、主要な曲輪の周囲全面に土塁をまわしたり、守るべき位置を選んで土塁を築くようになってきます。

出雲市東林木町の鶯ヶ巣城ひがしはやしぎ とびす（付図3 鶯ヶ巣城山頂曲輪群縄張り図参照）は、毛利元就が永禄五年（1562）に出雲国の平野部に突入して最初の拠点として築いた城です。この城の南西側の山裾やますそにある霊雲寺れいうんじには、宍道政慶しんじまさよしのものと考えられる墓所があり、鶯ヶ巣城は宍道氏の城といわれていますが、宍道氏は大野氏などとともに毛利氏からこの城の警備を任された武将（このような武将を番将ばんしょうあるいは在番衆ざいばんしゅうとよびます）の一人と考えるべきでしょう。しかし宍道氏との結びつきが

深いことは確かですから、以後なるべく鳶ヶ巣城を例としながら、戦国期の山城の特徴をみていこうと思います。



付図3. 鳶ヶ巣城山頂曲輪群縄張り図

鶯ヶ巣城は、標高282 mの山頂を中心とする山頂曲輪群と、山裾の標高約50 mの地点に設けられた山麓曲輪群からなっています。山頂曲輪群は、主郭を中心に四方の尾根に配された曲輪によって構成されており、曲輪の数はいくぶん少ないのですが、いわゆる放射状連郭式山城とよばれるタイプです。そして、ほぼすべての曲輪は周囲が土塁で固められています。しかしその高さは一様でなく、東Ⅱ郭の北側と東側のように高くて厚い（底幅約9 m高さ約2 m）土塁もあれば、同じ東Ⅱ郭でも南側のように底いものもあり、あるいはとぎれている部分もあるというようにポイントをついた土塁の使い方がされています。

さらに東Ⅱ郭の北側の土塁には、意識的に内向きのカーブが造られています。これを邪とよんでいます。これは、北側の谷間から直接主郭に攻め登ろうとする敵兵に対して、横合いから鉄砲や弓矢を射かけるため設計された工夫です。鶯ヶ巣城の場合、主郭の北側はほかの三方面と異なり、曲輪を設けにくい地形ですから、直接攻撃された場合の危険を、二本の堅堀によって敵兵の横の移動を制限するとともに、この邪からの横矢によって防ごうとしているわけです。

この前に紹介した勝山城には、西側に二ヶ所東側に一ヶ所、直角に折れ曲がった土塁が造られています。これも邪と同様なねらいをもつ施設で、折とよばれています。東側の折は、長い直線の曲輪の途中、ちょうど射程距離ほどの位置に戦闘の支点を作りだすために設けられており、畝状堅堀群と組み合わせられて、東側の緩斜面からの敵襲に対する効果的な横矢を構えていることがわかります。

このように、^{こくち}虎口（後にくわしく述べるつもりですが、城の入り口やそれぞれの曲輪の入り口のことを虎口といいます）や重要な曲輪などに接近した敵兵を、横から射撃することを^{よこや}横矢がかりといい、その施設をも横矢とよんでいます。鳶ヶ巣城の場合、西Ⅱ郭を攻め落して北Ⅰ郭へ侵入しようとする敵兵に対して、西Ⅰ郭から^{そくしや}側射がくわえられるように配置されていることも、広い意味での横矢がかりと考えてよいでしょう。

横矢がかりとならんで虎口が発達したことは、中世城郭から近世城郭への発達におけるもっとも重要な^{めやす}目安とされています。城やそれぞれの曲輪の入り口のことを虎口というのは、猛虎の^{しが}歯牙に例えたからともいい、小口ともいうのは、城の入り口は防御を^た厳重にしなければならぬので、^{せま}狭く小形のものがよいということから称したともいわれています。

たしかに、城はたてこもって守るだけではなく、攻撃の拠点でもありますから、城の出入り口というのは、厳重に締め切るだけでは役にたたず、機をみて討って出るのにも便利のように造られていなければならないわけです。そのため、まず、両脇を土塁や^{へい}塀で固めて^{きど}木戸（城戸とも書きます）を設けることが行なわれました。山城の場合だと、斜面を登って^{のぼ}登り坂から入る^{きか}坂虎口から始まり、土塁を^{くいちが}喰違いにしておいて、斜面を直進しないで斜めに入るようにした^{くいちが}喰違い虎口へと発達します。

この場合、^お喰違いの向きと坂道の折れ方によって出入りの難易や横

矢の効き方が違ってきます。城内から守備兵が出撃する場合に、虎口を出て右のほうに下るのを右前みぎまえとって、左前ひだりまえより良いとされています。なぜなら、虎口を右前で出ますと、身体の左側を城外に見せることになり、下り坂が何度屈曲しようと大体敵兵を左側の下の方向に見ることができます。逆に攻め登る敵兵は、虎口を右上方向に見ながら登ることが多くなります。弓を引くときは左半身ひだりはんみに構えますので、甲冑かっちゅうも身体の左側を守るように丈夫に作られています。左前だと全身を敵側にさらすことになるわけです。寄せ手の立場から考えますと、虎口まで迫って城内に矢を射込む場合、右回りの場所だと全身を城兵側にさらすことになって、攻めにくいわけです。したがって、虎口の坂道は、右向きに下りる右前がよく、左向きは不利です。喰違いの向きについても、城内から見て右側に開口する虎口を順じゅんの喰違いと呼び、左側に開口するものを逆さかの喰違いと呼んでいます。

鳶ヶ巣城の西Ⅲ郭は、山頂曲輪群と山麓曲輪群をつなぐ役割をになっていますが、この坂虎口は、土塁をめぐらせた下段の曲輪と、上段の逆L字方に曲がった土塁の上からとの、両方面からの横矢がきいていることがわかると思います。また西Ⅱ郭へ入るための坂虎口も、同様に、L字方に曲がった土塁の上からの横矢によって守られていることがおわかりでしょう。

虎口こぐちを厳重に防御しようとする意識がたかまると、虎口を見透みすかされないように前面に土塁を設けたり（これを蒺かざしといいますが）、逆に内側に土塁を設けたり（これを都しとみといいますが）するようになり、さらに

虎口のわきの土塁に折おりを設けて横矢がかけられるように造ったりするようになります。そしてこうした技法が組み合わされて、ますがた こぐち柵形虎口へと発達します。

柵形は土塁で囲って四角くした区画をいい、うまだ馬出しとともに、もっとも発達した虎口の形態であります。四角い形が柵に似ているから柵形とよぶという説と、出入りする部隊の人数を柵のように計ることができるから柵形とよぶという説とがあります。先に述べた勝山城には見事な柵形が造られています。これを地元ではひとます人柵とよんでいますから、この場合は、後者の意味で言い伝えられたものといえましょう。どの部分が柵形かおわかりでしょうか。付図2によって探してみてください。京羅木山から南へ向かって下って勝山城に続く尾根を、三本の堀切で切断しているのがわかると思いますが、それに続く方形の土塁で囲まれた区画が柵形虎口です。

付図3の鷲ヶ巣城にも柵形が造られているのにお気づきでしょうか。北Ⅱ郭の北側がそうですが、いくぶん不整形で、あわただしく加工されたようすが感じられます。またその北東方向の離れた位置に、ほりきり堀切で尾根筋を切断した内側にますがた柵形が造られているのがわかると思います。ところがこの場合、その南東側の尾根には、北Ⅱ郭のように曲輪としての加工がされてはいないのです。この尾根筋を曲輪として、鷲ヶ城の北東部の防御を固めるつもりでまず柵形が造られたものの、その後加工工事（これをふしん普請あるいはしろごしら城誘えとよびます）が中断したまま放置されたものと考えべきでしょう。

こうした普請の中断がなぜ起こったかは、推測に頼るしかありませんが、城域を拡大して守備兵の収容数を増加することも、急いで北東部の防御を固めるという必要性も、ともに遠のいたからであることは明らかです。私は、この背景を^{あまこけふっこうせん}尼子家復興戦にあるのではないかと考えています。永禄十二年（1569）に、出雲奪回をめざす^{やまなかしかのすけ}山中鹿介らは尼子勝久^{しょう}を擁して島根半島に上陸し、^{ほっき}松江市^{しんやま}法吉町の真山城を尼子家再興軍の本営としました。この時毛利方の主将の^{きつかわもとほる}吉川元春は、鳶ヶ巣城を本営として出雲平定作戦の指揮をとったようです。戦況は、一時的には山中鹿介らに優勢にすすみ、出雲の大半が尼子方になびくほどの勢いをみせますが、^{ふべやま}広瀬町布部山の戦いで^{そうくず}総崩れとなつて、元亀二年（1571）に出雲を退去せざるをえなくなるわけです。

このような状況のなかで、鳶ヶ巣城山頂曲輪群に対して、特に北東側の尾根伝いの攻撃に対する防御の必要性が意識され、急いで普請が進められたものと考えられます。二つの^{ますがた}櫓形にしても、^{ひずみ}堀切や邪による横矢がけにしても、土塁の厚みの違いまでもが、北東側の尾根伝いの攻撃を意識しているのがわかります。しかし、戦況が毛利方に有利になるにつれ、その必要性がなくなって途中で放棄されたのではないのでしょうか。

なお近世城郭では、^{たかいしがき}櫓形虎口は高石垣を築いて固められるわけですが、松江城でみますと、^{おおてまえ}県民会館の北側の^{おおてまえ}大手前の駐車場となっている広場から入った空間がそれにあたります。一般に櫓形で固められた虎口の門を^{ますがたもん}櫓形門といい、^{いち}外側の門を一の門^に内側の門を二の門とよ



写真2 松江城枳形虎口

びます。城兵を入城させようとする場合、まず二の門を閉じてから一の門を開いて枳形の中に入れ、一の門を閉じた後に二の門を開いて、城兵を枳形から曲輪内へ移動させるわけです。追いつがる敵兵に対しては、二つの門があるためにつけ込まれて侵入される危険が少ないことになります。逆に出撃しようとする場合は、まず一の門を閉じておいてから二の門を開いて、曲輪から城兵を枳形の中に入れ、二の門を閉じた後に一の門を開いて城兵を城外へ出すわけです。城兵が枳形に入った時に、隊形を整えることも不審な者の点検もできるわけです。つまり枳形虎口は、敵兵が直進しないようにして虎口を防御するとともに、出撃の際には城兵を待機させるための武者溜むしゃだまりのはたらきもする

わけです。

虎口の工夫としての馬出し^{うまだ}は、主として東国において発達しました。城門の前に設けて、敵の攻撃から虎口を守るとともに城兵の出入りを確保しようとする小さな曲輪のことであり、堀を越えて外に張り出し、一見堀の中の島のようにも見えます。馬出しの前面と左右両面は、土塁をめぐらして虎口を見通されるのを防ぎ、虎口と馬出しの間と馬出しと城外との間は、土橋^{どばし}で渡るようになっているのが普通です。柵形よりも攻撃性の強い虎口施設といえましょう。武田氏の勢力圏に造られた丸馬出し^{まるうまだ}に対し、後北条氏の勢力圏の角馬出し^{かくうまだ}というように、地域的な違いがはっきりしているのが特徴ですが、好例がないのでこれ以上の説明は省くことにします。

3) 山城の築城

これまでの説明で、山城の発達とそのなかでの戦国期の築城技術について、おおまかな理解が得られたと思います。次には、それらを築城の過程にそって改めて考えてみましょう。

山城を築こうとする目的やその背景となる政治的状況によって異なりはしますが、まずどのような山地を選定するかが大きな問題となります。この城地の選定のことを地取り^{じとり}とよんでいます。

そして築城の目的とその山地の地形に応じて、曲輪を配置したり、堀切^{たてぼり}や堅堀^{ますがた}あるいは柵形・土塁などを配する基本設計が行なわれるわけです。このように山城のグランドプランを定めることを縄張り^{なわばり}とい

います。もちろん築城者からすれば、縄張りを考えてそれに適した地取りをするというように、相互に関係しあうものであることはいうまでもありません。また、鳶ヶ巣城の山頂曲輪群で考えたように、その城をとりまく軍事的な状況の変化によって、縄張りは変えられるものでもあるわけです。

縄張りが決まりますと、次にはいよいよ土木工事が行なわれることとなります。つまり、山頂や山腹を削ってならし、^{きりざし}切崖をかき上げて曲輪としたり、尾根筋や山腹斜面に堀切や堅堀を掘ったり、掘り上げた土をつき固めて土塁としたりするわけですが、こうした土木工事を前に述べたように^{ふしん}普請あるいは^{しろごしら}城誘えといっています。状況の変化や時代の進展に応じて縄張りは変えられるものですから、普請もまたくりかえされるものと考えてよいでしょう。

そして普請の後かそれと平行しながら、^{へい}塀や^{さくれつ}柵列を作ったり、^{やぐら}櫓や倉庫などの建物の建築工事が行なわれます。これを^{まくじ}作事とよびます。この作事と普請の段階では人手だけが頼りで、多くの労働力が必要ですから、周辺の人々が多数^か駆り出されることとなるわけです。とりわけ、塀や柵列にしても櫓や倉庫などの建物にしても、定期的な修理や取り替えを必要としますから、作事のための労働力は常に求められていると考えてよいでしょう。

出雲における毛利氏の築城をみてみますと、戦略上重要な支城の場合、まず^{ふしんぶぎょう}普請奉行が任命されて築城工事全体の指揮や監督をしたようです。前に述べた松江市法吉町の^{しんやま}真山城の場合、尼子氏が退去した

後に毛利氏が大修理をしましたが、この普請奉行には、井上就正・進藤就勝・野村士悦といった毛利家中の旧臣か、元は尼子方の出雲国人であっても毛利元就や輝元の信頼を得た者が任命されています。そして築城が終ると、別人を^{けんし}検使として派遣しています。平田城の場合は、赤川元之・栗屋元方が派遣されていますが、彼等は検使として城の仕上がり具合を検査したのちにこの城を受け取り、引き続き^{ばんしょう ざいばん}番将（在番衆^{しゅう}とも）として平田城の警備にあったものと考えられます。

湯原春綱のように、毛利氏に服属した出雲国人をそのままその城（松江^{にしはまさだ}市西浜佐陀町 ^{まんがんじ}満願寺城）に在番させる場合は、春綱に対する普請をうながす命令は出されていますが、毛利氏からの普請奉行の任命も検使の派遣もなかったようです。湯原春綱は、尼子家復興戦当時、山中鹿介らの来襲に備えて^{か が}加賀城（八束郡島根町）を築きますが、毛利元秋を通じて申し立てて、許可を得たうえで着手しています。勝手な築城は許されなくなったことがわかりますが、加賀城程度の^{はじろ}端城の場合は、^{じ と}地取り・^{なわば}縄張りから^{ふしん}普請・^{さくじ}作事までのすべてと、恐らくその後の在番までもが一括してゆだねられたのでしょう。なお加賀城では、ほぼ一年後に^{なわ}縄の結び変え（恐らく柵列や塀に使われている縄なのでしょう）と^{まきぎし}曲輪の切崖のかき上げ（切崖にしても土塁にしても、^な叩きしめて固めて作られるのですが、土造りですからどうしても崩れてしまい、堀底が埋まることになるわけです）が必要になったようで、毛利氏からの「^{じょうい}上意」として、近隣の村からこれに使用する人夫が徴発されています。

邇摩郡温泉津町の鵜之丸城は、毛利氏の水軍の要港として活用された温泉津港の湾頭を扼する城ですが、この築城にあたっては、邇摩郡静間郷から那賀郡川上郷にいたる石見東部の十二ヶ所の郷村に対して、最高八十杖から最底七杖が割りあてられています。この一杖という単位が何を意味するかですが、毛利氏にあっては一間の塀や柵の作事役をさします。別の史料によりますと、具体的に何人の人夫を必要とするのかはわかりませんが、郷村の貫高五貫文ごとに一間の作事役をかけたことがわかります。

このように、周辺の民衆にとって山城は、たとえその城をめぐる戦闘がなくても、それが造られるということだけで、過酷な負担をもたらすものであったという事実を忘れてはならないでしょう。

3. 宍道要害山城の縄張りについて

1) 地 取 り

ご存じのように、宍道要害山城は、宍道駅の西側に向かって突き出した丘陵の先端に位置します。主郭は、標高42.1メートル比高約35メートルの地点に設けられています。

ごく新しい時期まで、国道9号線から北側は宍道湖だったので、^{きそく}佐々布川に沿ってのびるこの丘陵は、その川口を^{やく}扼する位置をしめています。もしかすると、当時佐々布川の川口はもう少し奥部へ湾入していて、宍道要害山城の丘陵は、宍道湖に突き出した^{みさき}岬のようだったかもしれません。もしそうだとすれば、宍道要害山城は、湯原氏の満願寺城のような宍道湖における^{すいぐんじょうかいぞくじょう}水軍城（海賊城ともいい、船の^{てい}停泊につごうのよい岬や島に設けられた城で、軍事的要素だけでなく、船舶の管理や海上の監視につごうのよい場所が選ばれています）とよぶべき^{じと}地取りといえるかもしれません。

いずれにしても、宍道湖上の水運の警備にあたり、湖水を利用しての敵襲に備えるには^{かっこう}格好の位置といえます。さらに、金山要害山城の支城として利用するに適切な距離と、ところどころに^{きまちそう}来待層の露出したやせ尾根の連なる、ほどほどの広さの丘陵だったことも考えなくてはならないでしょう。

2) 縄 張 り

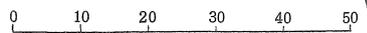
では続いて、この城の縄張りの検討に移りますので、宍道要害山城縄張り図（付図4）をご覧になりながら読んで下さい。なお説明上、主郭とか北Ⅰ郭あるいは西Ⅱ郭とかのよび方をしますが、郭とは曲輪のことで、城の中心をなす曲輪（これを主郭とよびます）との位置関係から名づけたものです。近世城郭では、本丸・二ノ丸・三ノ丸といったよび方をし、中世の山城にもこれをあてはめることがありましたが、適当とはいえないので今日では使われていません。

さて宍道要害山城の築かれた丘陵は、先端部分が二つに分かれており、Y字形をしています。この城の中心をなす主郭は、Y字形のいわば足の裏の部分にあたります。主郭は、南北約24メートル東西約20メートルの、北側に向かっていくぶん広がった台形をしています。忠魂碑が建てられる時に削られたそうで、そのために南西隅の古墳の石室が露出してしまったと聞いていますから、本来はもう少し標高も高くまた面積も狭かったものと考えられます。眼下に城兵の収容力の大きい北Ⅱ郭を配していますから、城兵を指揮するうえで、この山城の中樞をなす曲輪であることにまちがいありません。

主郭の西側と東側には小さな曲輪を配して、両側の斜面を固めています。ただ、西側の小曲輪とは異なり、東側の小曲輪は主郭や他の曲輪との連絡を意識したとは思えない位置に設けられています。そして、主郭の北側の約8メートル下がった位置に小規模な曲輪（北Ⅰ郭）を置き、さらに50センチメートルほど下がった地点に長大な曲輪（北Ⅱ



宍道要害山城
 1990.2 作図 山根正明
 1991.3



付図4. 宍道要害山城縄張り図

郭)を設けています。

北Ⅰ郭の中央部には湧水ゆうすいがありますから、この曲輪は主郭への坂虎さかこ口ぐちを守るとともに、水みずの手曲輪てぐるわ(井戸曲輪いどぐるわとも)の役割を果たしているといえるでしょう。山城にとって水がいかに大切かは説明を要しないと思います。この丘陵は地下水脈に恵まれているようで、もう一ヶ所大きな水源(付図4のWマークの部分)がありますが、主郭の直下にあるという点でまことに貴重な水源といえます。

北Ⅱ郭は南北60メートルもある長大な曲輪で、東側の3メートル下がった斜面には銃陣をしくための腰曲輪こしぐるわをのばしています。北Ⅱ郭の北端からは、Y字形の先端に取りついた敵兵を見通すこともでき、西側からの敵襲に対応して城兵を転用することも容易ですから、この曲輪こそ宍道要害山城の防御の事実上の中心と考えられます。

ここまでがY字形の足の部分ということになりますが、この北には湧水点うちふところを内懐にはさむようにして東西に尾根ぶんきが分岐しています。東側の尾根には北Ⅲ郭と北Ⅳ郭が配置され、西側の尾根には西Ⅰ郭が設けられて、東西両側からの攻撃に備えています。北Ⅳ郭は上部さくへいの削平はおおまかですが、東の雲松寺側は垂直に切りたった来待層の崖を利用しており、直下の帯曲輪おびぐるわとあいまって防備を堅固にしています。

ただこの付近は畑や墓地として利用されていますので、かなり当時の地形が変えられているように思います。北Ⅳ郭の北側もそうですが、西Ⅰ郭の北側は、宍道要害山城の最北端の曲輪だったところが墓地に転用されたに違いありません。



写真3 宍道要害山城 54号線より

3) 普 請

おおまかな縄張りについては大体述べましたので、これにしたがって行なわれる、^{ふしん}普請とよばれる土木工事の特徴についてみてみましょう。まず、この宍道要害山城には、^{ほりきり}堀切も^{たてぼり}堅堀も造られていません。たとえば、主郭の南側の尾根続きに堀切を掘って^{しやたん}遮断することは、この程度の城域をもつ山城では普通に見られることですが、ここでは見あたりません。南側の背後を切断するよりも、尾根続きに本城との連絡道を残そうとする、先端の支城としての性格からでしょう。

曲輪については、上部平面が、今見られる主郭や北Ⅱ郭のように平

坦に削平さくへいされていたかどうかは疑問です。というのも、公園となる時期に手が入れているからです。また曲輪の平面形も、四隅よすみを直角にしたり、意識的に折おりや邪ひずみを設けたりせず、自然の地形に応じた普請がされているといえましょう。しかし、切崖きりぎしの加工はていねいで、特に北Ⅱ郭の北側はみごとな急傾斜に仕上げられています。主郭の北西側や北Ⅳ郭の東側のように、来待層の露出部分を活用するなどの工夫がとり入れられていることは既に述べたとおりです。

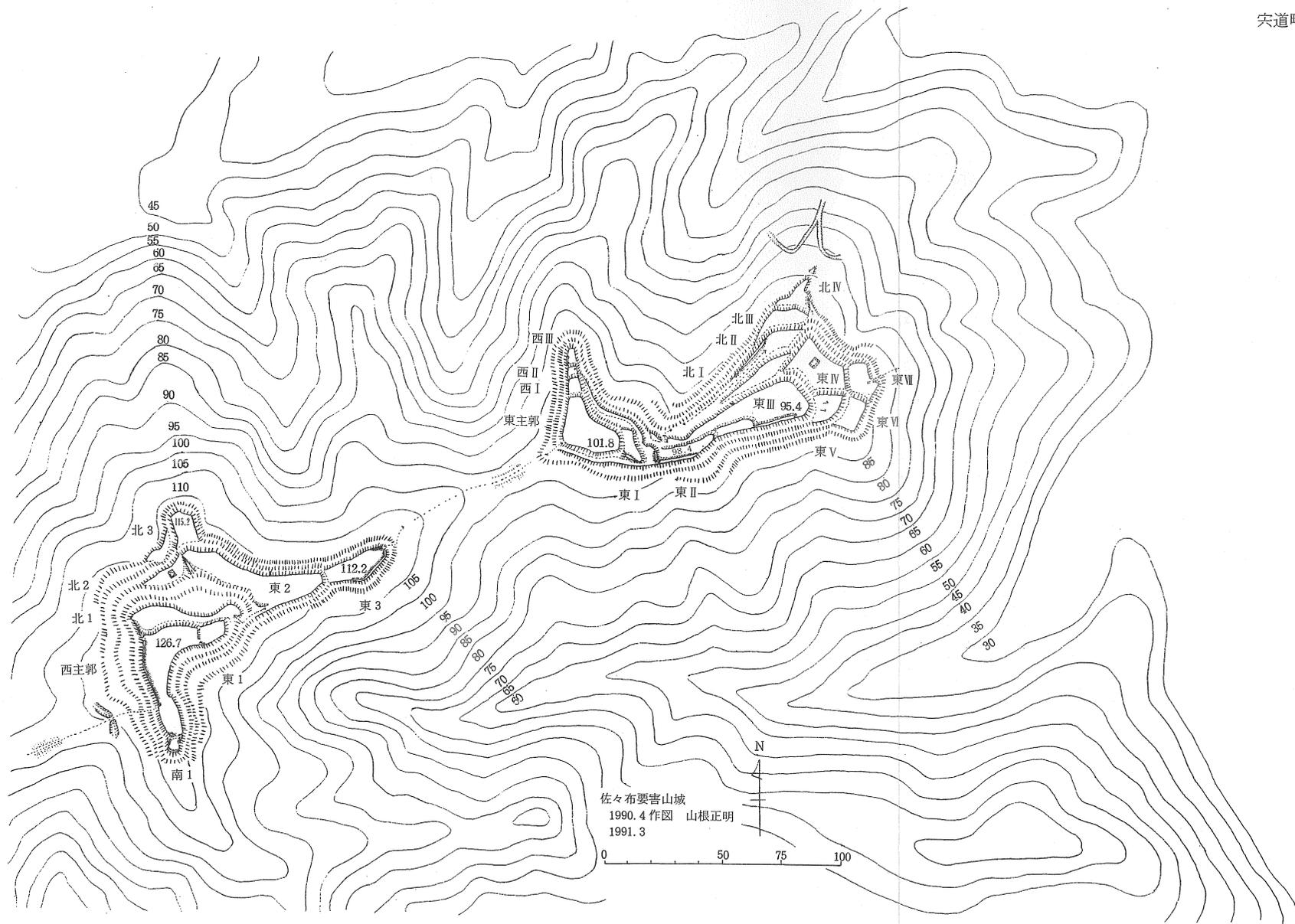
4. 佐々布要害山城の縄張りについて

1) 地 取 り

佐々布要害山城は、枇杷区通から北東に向かってのびる丘陵の先端で、佐々布川を見下ろす位置をしめています。後に詳しく述べますが、この城は東西二つの主郭と、それに連なるいくつかの曲輪群からなっています。したがって、城兵の収容能力はかなり大きいといえましょう。

二つの主郭のうち、西主郭は標高127メートル、東主郭は標高102メートルの地点に位置し、東主郭の比高は90メートルあります。岡の目や大森と坂口のあたりで広がった佐々布川の谷は、この東主郭の東麓でいったんせばまって、さらに佐々布中で広がりますので、佐々布川ぞいにさかのぼって侵入しようとする敵に備えるには、佐々布要害山城は格好の位置をしめているといえましょう。

しかも、宍道要害山城とは直線距離で1.7キロメートルしかなく、金山要害山城との間もほぼ等距離の1.8キロメートル程度で、もちろん両城を見通すことも可能です。つまり、湖岸の支城である宍道要害山城と、本城である金山要害山城との中間点をしめる、典型的な繋ぎの城ということが出来ます。移動する途中に位置してその兵力を収容することも、繋ぎの城の機能としては重要なのですが、その意味からも適当な条件を備えているといえます。ただ両城を見通すためでしょうが、佐々布川をはさんだ対岸にあって、連続する丘陵上でないこと



付図5. 佐々布要害山城縄張り図

が、繋ぎの城としての難点といえば難点でしょう。

2) 縄 張 り

前に述べたように、この城は東西二つの曲輪群からなっています。

(付図5 佐々布要害山城縄張り図を参照してください) 西曲輪群の中心をなす西主郭は、南北軸39メートルの逆L字形をしており、佐々布中の谷奥からの比高約90メートルの地点に位置しています。標高は127メートルありますが、^{びわくどし}枇把区通から北東に向かつてのびるこの丘陵は、かくべつ^{けわ}険しいというほどの地形ではありません。ご存じのように森林公園として整備されている最中ですが、公園として選定されたこと自体ならかな起伏の丘陵だからでしょう。

西主郭は、そうした丘陵がせばまった位置に、^{ほりきり}堀切を掘ることで西側を切断し、攻撃に対する備えとしています。また西側斜面にそって土塁を築いて防備を堅固にしています。南側と北側はそれぞれ南1郭と北1郭で固め、北側にのびる尾根上にはさらに北2郭・北3郭とその^{すそ}裾を守る小曲輪を置いています。西主郭の南東側は、これといった施設は設けられていませんが、^{せま}狭くて急な谷斜面となってますから、自然の地形をもって防御としたものでしょう。

西主郭の北東側にのびる尾根は、幅も広く傾斜も^{ゆる}緩やかですので、ここには東2郭・東3郭が設けられています。東2郭は、城兵の収容力も大きく、上部から東3郭を守るだけでなく、北2郭や北3郭に対する支^{たす}援にもあたれるように北西側に延長されていることがわかりま

す。北東側にのびるこの尾根の、先端に位置するのが東3郭です。この曲輪は、西主郭の東端を防御するうえでの拠点であると同時に、東主郭との連絡を保持することを役割としています。喰違くいちがいの坂虎口さかこくちをはさんで、北東側と南東側に土塁が築かれているのは、そのためであることがおわかりになるとと思います。

東3郭と東主郭の間は直線距離にして約70メートルあります。東3郭の標高が112メートルですから、約15メートル下ってから斜面を約4メートル登ると、標高102メートルの東主郭にいたります。

東主郭は東曲輪群の西端で、西曲輪群の東3郭とただちに連絡できる地点に位置しています。東主郭の北側には階段状に曲輪を重ねて(西I郭・西II郭・西III郭) いますが、主たる備えは北東方向へY字形にのびる尾根に設けられています。東VII郭と北IV郭とがY字形の頂点に位置する最先端の曲輪で、東VII郭には岡の目橋方向に向けて虎口が開いています。城兵は、この虎口から入って東IV郭へと進み、東V郭をへて東III郭あたりに駐屯ちゅうとんしたものと思われます。

北IV郭は最も低い位置に設けられた曲輪で、いちばん敵襲をうけやすい曲輪といえます。そのためでしょうが、北東方向には尾根を切断するための堀切ほりきりが掘られています。しかもこの堀切は、長く下方にのばされて一本に合流させています。

北IV郭を守る北III郭は、北II郭によって、北II郭は北I郭と東IV郭によって守られていることがわかると思いますが、北II郭から北I郭と東III郭の北側を登って、東II郭の北側につながる通路にはお気づき

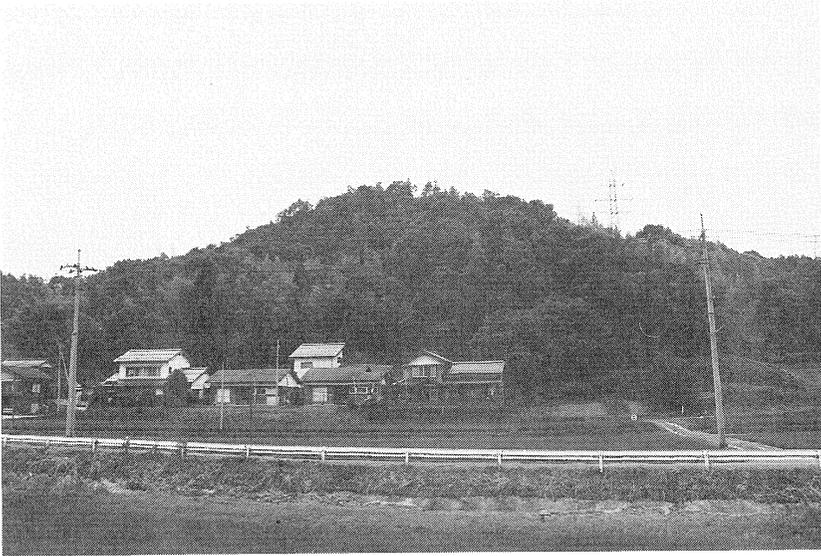


写真4 佐々布要害山城 54号線より

でしょうか。この連絡路は、北Ⅱ郭の北西側の登り土塁によって、この方向からの攻撃に対して防御されているわけですが。そして東Ⅱ郭の北側の虎口は、東Ⅰ郭の東側下方の小曲輪に守られています。つまり、北Ⅳ郭さらに北Ⅲ郭と攻め落されても、上部の曲輪から横矢を^{よこや}かけながら、城兵を^{てっしゅう}撤収させるための縄張りがなされているわけです。

東Ⅰ郭の東側下方の小曲輪は、東曲輪群の交通路のターミナルの役割をはたしているといえましょう。つまりここからは、東Ⅰ郭をへて東主郭へ通ずるのは当然としても、東主郭の北東側の^{こしくるわ}腰曲輪を通して西Ⅱ郭へも行くことができますし、東主郭の南側の腰曲輪へもつながっていることがわかります。

このように、曲輪間の連絡の巧みさが、東曲輪群の縄張りの特徴の一つといえます。そして、東主郭を最後の拠点として抵抗しながら、城兵を西曲輪群へと安全に撤収させられるように配慮されているわけなのです。

3) 普 請

普請の面からみますと、佐々布要害山城でまず特徴的なのは、土塁の使い方が見事なことといえます。まず西主郭の西側は、高さ約1メートルの土塁が北に向かってのばされています。これは、北1郭の西側の土塁と連結していることがわかると思います。そして南1郭の西側の土塁とも連結するように縄張りされています。つまり西主郭の西側は、登り虎口の城戸きとから南側の一部（この部分は、柵列さくれつか銃眼じゅうがんを開けた塀へいだったのでしょう）をのぞいて、土塁のラインで防御されているわけです。

しかも、二通りの土塁の造り方が用いられているところにも注目されます。一般に土塁は、堀とすべき部分を掘り上げた土や、他から運んだ土を盛り上げ叩たたきしめて築き上げられます。ですから、普請の最中に雨が降ると、土塁の強度が増すといわれたそうです。発掘調査をしなければ断定的なことはいえませんが、西主郭の西側の土塁は、おそらくこの叩き土塁の方法によるものでしょう。東3郭の土塁もおそらく同様と思います。

これに対し、防御すべき斜面の内側を掘り込んで曲輪とし、曲輪の

外壁としての土塁を削り残して造る方法もあったようです。このような削り残しの土塁と思われるのが、北1郭の西側の土塁です。北1郭は、西主郭の北側の斜面を削り取り、その土を北側にせり出すようにして平地を広げて造られたと思いますが、斜面を削り取る時に、意図的に斜面の西端が削り残されたものと考えられます。土塁そのものが、付け根ほど高く厚く、先端にゆくほど傾斜しているのは、自然の地形に応じて造られているからでしょう。しかし、防御力の弱くなりがちな曲輪の端を、自然地形を利用しながら、しかも労働力の節約も考えながら堅固にする、うまいやり方といえます。

すでにお気づきと思いますが、南1郭の東側と西側、東1郭の南側、東2郭の西側の土塁はいずれもそうですし、東曲輪群ですと東I郭の南側、西Ⅲ郭の西側、北Ⅳ郭の東側の土塁は、削り残して造られた土塁と考えられます。実はこのような斜め土塁とでも名づけるべき土塁の造り方は、毛利氏のかかわった山城によく見られる手法で、毛利系の築城技術の一つと考えてよいでしょう。

なお斜め土塁とはいえませんが、東曲輪群の東Ⅱ郭の南側の高さ約50センチメートルの土塁も、削り残しの土塁と考えられます。東Ⅲ郭の南側も同様な造り方と思いますが、これは西端の高さ約2メートル東端の高さ約1メートル底幅約3メートルという立派な造りです。また北Ⅱ郭の西北側に、通路を守るための登り土塁が築かれているのも、土塁の利用になれていることを感じさせます。

土塁がもっとも効果的に曲輪の防御に使われているのは、西曲輪群

の東3郭もそうですが、何といたっても南1郭をおいて他にありません。これは、南側の尾根伝いの攻撃から西主郭を守るべく配置された小曲輪で、榊形虎口の機能もはたしています。この^{こぐちぐるわ}虎口曲輪は、前に述べたように東側と西側は斜め土塁で守り、南側の攻撃正面も土塁で固め、背後は西主郭の南端に土塁を築いて防御するといった念の入れようです。

普請の面からもう一点注目しておきたいのは、堀についてです。まず、西主郭の西側には^{ほりきり}堀切が掘られて、西側の尾根筋（森林公園として造成中）からの攻撃を^{しゃだん}遮断しています。西主郭の斜面を下って平担な尾根道に変わる、ほぼ^{せんいてん}遷移点の位置に掘っています。そして堀切には、中央部が残されて^{どぼし}土橋とされており、それに続く西側の尾根には両側を削って造られた幅1～2メートルの通路がのびています。これによって城外との連絡がとれることはもちろんですが、攻撃側にとってもこの一本道を伝って攻め込まざるをえないことになり、効果的な位置に掘られた堀切とあいまって、西主郭の守備兵にとって守りやすい^ひ縄張りとなっています。

もう一つ注目されるのが、東曲輪群の北Ⅳ郭の北東側の堀切です。ご覧のように、二つの尾根を切断した堀切が一つに合流し、一本の^{たて}堅堀とされています。このような形の堅堀は、^{おおちくみずほちようふた}邑智郡瑞穂町二ツ山城などに見られるもので、築城技術の^{てんぱん}伝播について考えるさいの例の一つとなるでしょう。

なお、西主郭と東主郭のあいだの尾根には、両側を削って造られた通路は部分的にしか認められませんし、堀切も掘られてはいません。

あくまでも、東西の両曲輪群があい呼応して防御しあうものという前提の縄張りであり、その意味からは、両曲輪群がそれぞれ独自の防御機能を備えながらも、全体としては一つの山城として統合されているといえるわけです。このような縄張りの城を一城別郭の城とよんでいますが、佐々布要害山城は、そうした縄張りにしたがった普請がなされているといえるでしょう。

5. 金山（坂口）要害山城の縄張りについて

1) 地 取 り

ご在じのように金山要害山城は、金山川かなやまと坂口川さかくちによって南北を削られた丘陵の上に位置しています。主郭の標高が148メートル、比高は130メートルという雄大な山塊さんかいで、後に述べますように縄張りの点から見ても普請の面から考えても、いかにも有力国人宍道氏こくじんの本城にふさわしい地取りといえましょう。

宍道氏しよりょうの所領の広がりについては不明な点が多いのですが、この金山要害山城の山麓あたりもそうだったはずです。すなわち、坂口川を合流させた金山川が右岸から流れ込み、岡おかの目めから流れ下った細流が左岸から佐々布川にそそぎ込む、その合流点のあたりに開かれた水田と、それぞれの谷あいたなだの棚田とが、宍道氏こんぼんしよりょうの根本所領の一つだったのではないのでしょうか。

もちろん交通路から考えても、国道54号線とJR木次線きすきせんがこの地点

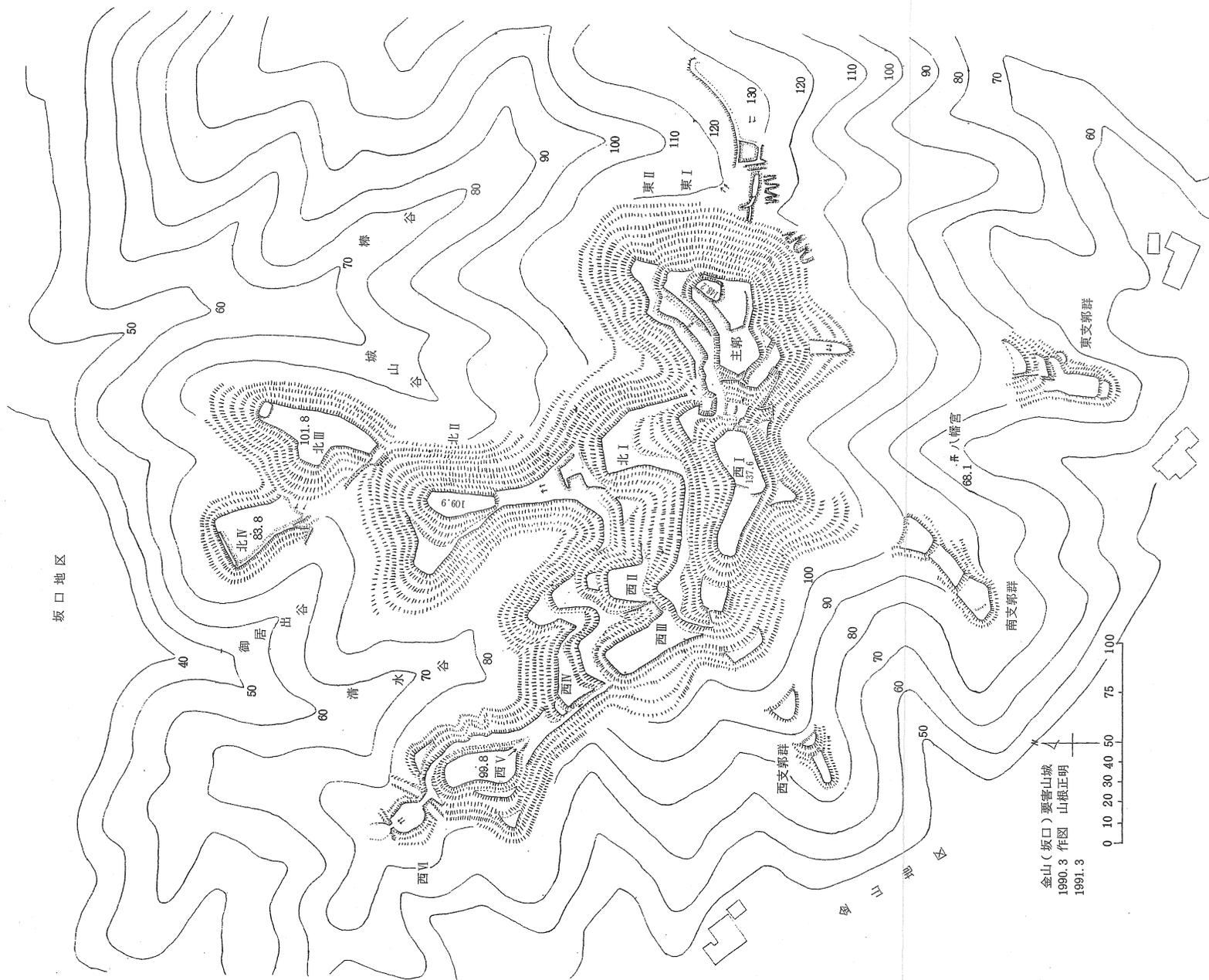
で合流していることから明らかなように、大原郡や仁多郡方面への通路を扼^{やく}しています。また湖岸と湖上を利用しての、意^い宇^う郡や島根郡あるいは簸^ひ川^{かわ}郡方面（中世には原^{はら}手^てとよばれていたようです）への進出にも便利なことはいうまでもないでしょう。

2) 縄 張 り

金山要害山城は、雄大な山塊を地取りしていますので、各所に曲輪が配されています（付図6 金山（坂口）要害山城縄張り図参照）が、中心となる主郭（通称詰^{つめ}成^{なり}）は城域の東の隅に位置しています。これ自体広大な曲輪ですが、北東の隅にはさらに一段高い曲輪（通称天^{てん}狗^く成^{なり}）が造られています。これこそ金山要害山城の天^{てん}守^{しゅ}曲^く輪^わと考えてよいでしょう。

主郭の東側の椿^{つばき}谷^{だに}の方面は、その奥部の通称馬^{うま}の背^せとの高低差が約24メートルもありますから、この方面の防御は自然地形の険^{けわ}しさに依存しているといえます。主郭の南東側と馬の背の南側とは、畝^{うね}状^{じょう}の^{たてぼり}塹^{ぼり}堀^{ぼり}が造られていますが、主郭のためというよりも、後に述べる水^{みず}の手^て防御のためと考えるべきでしょう。

主郭の西側は、巨大な堀切で西Ⅰ郭（通称二^にの^{なり}成^{なり}）との間を切断しています。底幅は約6メートルで、主郭との高低差は約12メートルもありますから、いかに大量の労働力を必要としたか想像できるでしょう。主郭の南西側の曲輪は、八幡宮^{はちまんぐう}の元^{もと}社^{しゃ}地^ちだったそうで、いくぶん拡張されている可能性もありますが、この大堀切^{おおほりきり}を見下ろすとともに、



付図6. 金山(坂口) 要害山城縄張り図

金山(坂口) 要害山城
1990.3 作図 山根正明
1991.3

今の八幡宮のある谷間からの攻め口を防ぐ役割を担わせられています。

なお主郭と西Ⅰ郭・西Ⅲ郭（通称椎木成）の金山谷の側には、突き出した尾根先ごとに曲輪群が設けられています。こうした支郭群は、この山城の縄張りの雄大さを端的に示すものではありませんが、背後の主要部との連絡が不十分という弱点をもっています。ある程度の防衛戦闘の後に、主要部の曲輪に引き上げるものとして配置されたのでしょう。

主郭の北側は、椿谷と城山谷の尾根に東Ⅰ郭と東Ⅱ郭（通称出張り成）が置かれ、いずれも帯曲輪をのばして大堀切の下方と連絡しています。実は大堀切の下方に、出雲の山城としては非常に珍しい櫛形虎口が設けられているのです。

標高138メートルの西Ⅰ郭も、主郭に劣らない広大な曲輪で、東西軸は約67メートルもあります。主郭とこの西Ⅰ郭が、城域の中枢部といえますから、この中間点から北に向かってのびる城山谷と清水谷の間の尾根には、いくつもの曲輪が配置されて、両側の谷あいからの攻撃に備えています。

この要となるのが北Ⅰ郭です。この曲輪の東南部は、延長されて大堀切下方の櫛形虎口に連絡し、西南部は西Ⅰ郭のすそ（通称長成あるいは馬乗り馬場）をめぐる西Ⅲ郭へとつながっています。後に述べるように、西Ⅱ郭のつけ根には坂虎口があって、これを下ると西Ⅵ郭にまで連続していますから、北Ⅰ郭は北側からと西北方向からとの交

差点となり、また柵形虎口をへて主郭と西Ⅰ郭にもつながっているわけです。

北Ⅰ郭の北側下方にも柵形状の遺構^{いこう}が認められますが、これを下ってさらに約5メートル登った地点に北Ⅱ郭（通称金比羅成^{こんびらなり}）が設けられています。北Ⅱ郭の西側にはせまい帯曲輪があって、清水谷と御居出谷^{いでに}との間に突き出した小曲輪につながられています。北Ⅱ郭の北側は、比較的ゆるやかな傾斜で北Ⅲ郭（通称きまちなり^{きまちなり}）へつながっていますから、御居出谷の谷奥にあたる位置に、堀切^{ほりきり}が掘られていることがおわかりになると思います。北Ⅲ郭の北端には一段高い一角が設けられていますが、これは櫓台^{やぐらだい}と考えてよいでしょう。

北Ⅲ郭の西側下方約18メートルの位置にあるのが北Ⅳ郭（通称御居^{おい}成^{なり}）で、坂口の谷に対する最北端の曲輪となります。ただそのわりには防御施設は貧弱で、北側の土塁もほんのわずかに盛り上げただけで、高低差約36メートルの急斜面に頼っているだけといえます。この曲輪は、実道氏が日常の住いとしたという言い伝えがありますが、たしかに、御居出谷から登る坂虎口がつけられておりますし、切崖^{きりぎし}の内側には、上幅50センチメートル程度の溝^{みぞ}がめぐっていますから、番将^{ばんしょう}たちの居住施設が設けられていた可能性はあります。

さて、西Ⅰ郭から西北方向にのびる尾根に対する縄張りをみてみましょう。この尾根の先端は三つに分かれており、一方は通称熊^{くま}やぶ尾根^{おね}とよばれて坂口側に突き出し、他の二つは金山谷方向に突き出しています。この扇^{おうぎ}の要^{かなめ}の位置をしめているのが西Ⅵ郭です。ただこの曲

輪自体は、二本の堀切で尾根筋が切断されているだけで、上部の削平が不十分ですから、防御の主体は西Ⅴ郭（通称茶臼成）に置かれていたと考えられます。つまり二本の堀切を土橋を渡って突破したとしても、西Ⅴ郭の東側をぐるっとまわりこまなくてはなりませんから、西Ⅴ郭からの横矢にさらされることになるわけです。

そしてこれを通過した後は、西Ⅳ郭と西Ⅲ郭からの攻撃にさらされることになり、西Ⅳ郭の西側の坂道はわざとせまく造ったようですから、攻撃側の危険は一層たかまることでしょう。なお西Ⅳ郭は東方へ通路をのばして、清水谷に面した小曲輪と連結しています。西Ⅳ郭の上段の曲輪も同様ですが、この中央部から、西Ⅱ郭の西側斜面を登って西Ⅲ郭のつけ根の虎口にいたるわけですので、ここまで攻め登ってきた敵兵も、西Ⅱ郭と西Ⅲ郭の両方からの攻撃を受けることになるわけです。

このように、西北方向の尾根筋に対する縄張りは、高低差を利用するだけでなく、通路を折り曲げることによって、攻撃側を消耗させるように仕組みられていることが読みとれます。その意味で、北側の尾根筋に対するよりも、より緻密な縄張りがなされているといつてよいでしょう。

3) 普 請

金山要害山城の普請でまず目を奪われるのは、何といても、主郭と西Ⅰ郭の間の堀切の雄大さです。工事量の膨大さを考えると、動員

されて働いただろう、遠い先祖たちの姿を想像しないわけにはいきません。全体的にこの城の普請は、それぞれの曲輪の上面の削平も平坦ですし、切崖も急傾斜に加工されていて、ていねいな造りがされていますから、大量の労働力が動員されたことは明らかです。

なお、堀切はこのほかに西Ⅵ郭の北西側と南東側にありますが、まずその規模が圧倒的に違うということはただちにおわかりのことと思います。しかしそれ以上に、この二本の堀切は、城域の最西端にあって、なだらかな尾根筋を切断して、城域全体を確定するという働きをしています。つまり佐々布要害山城の場合ですと、西曲輪群の西側の堀切と同様な働きをしているわけです。それに対して主郭と西Ⅰ郭間



写真5 金山(坂口)要害山城 北側上空より

の大堀切は、中間を掘り切ることによって、それぞれの曲輪ぼうぎよせいの防御性をより高めることで共倒れを防ぐというねらいをもっています。北Ⅱ郭と北Ⅲ郭の間の堀切も、規模こそ違え同様なねらいをもった堀切といえるでしょう。

畝状堅堀うねじょうたてほりの機能についてはすでに述べたとおりですが、金山要害山城では東西2群の畝状堅堀が掘られています。このうち東側の、通称馬の背の南側に造られたそれは、傾斜が緩やかで、いわゆる寝た状態になっています。しかし、その背後には土塁を築いており、土塁と組み合わせて防御力を高めるといふ、進んだ縄張りがされています。

次に注目されるのは、大堀切の北側に設けられた榊形虎口ますがたこくちです。深さ約5メートル、一辺が5メートル程度の方形で、切崖は急傾斜に削られています。普請の程度でくらべると、前に述べた鷲ヶ巢城とびすの榊形よりもはるかにていねいで、勝山城かつやまのそれに匹敵するといつてよいでしょう。ただ規模においては、約20メートル四方もある勝山城の榊形にははるかに劣るといわなくてはなりません。

また、それぞれの榊形虎口を、それぞれの城の縄張りのなかにおいて考えてみますと、鷲ヶ巢城の榊形も勝山城の榊形も、そして佐々布要害山城の西曲輪群のそれも、ともに城域の外縁部がいえんぶに設けられていますが、金山要害山城の榊形は、城域のかなり奥部に設けられています。そしてこの榊形が、北西方向に開口し、北Ⅰ郭と東Ⅱ郭へつながっていることはすでに述べたとおりです。開口部をそのまま下っていくとしるやまだに城山谷しるやまだにへ行きますから、北Ⅰ郭と東Ⅱ郭へつながる帯曲輪おびぐるわは、この方

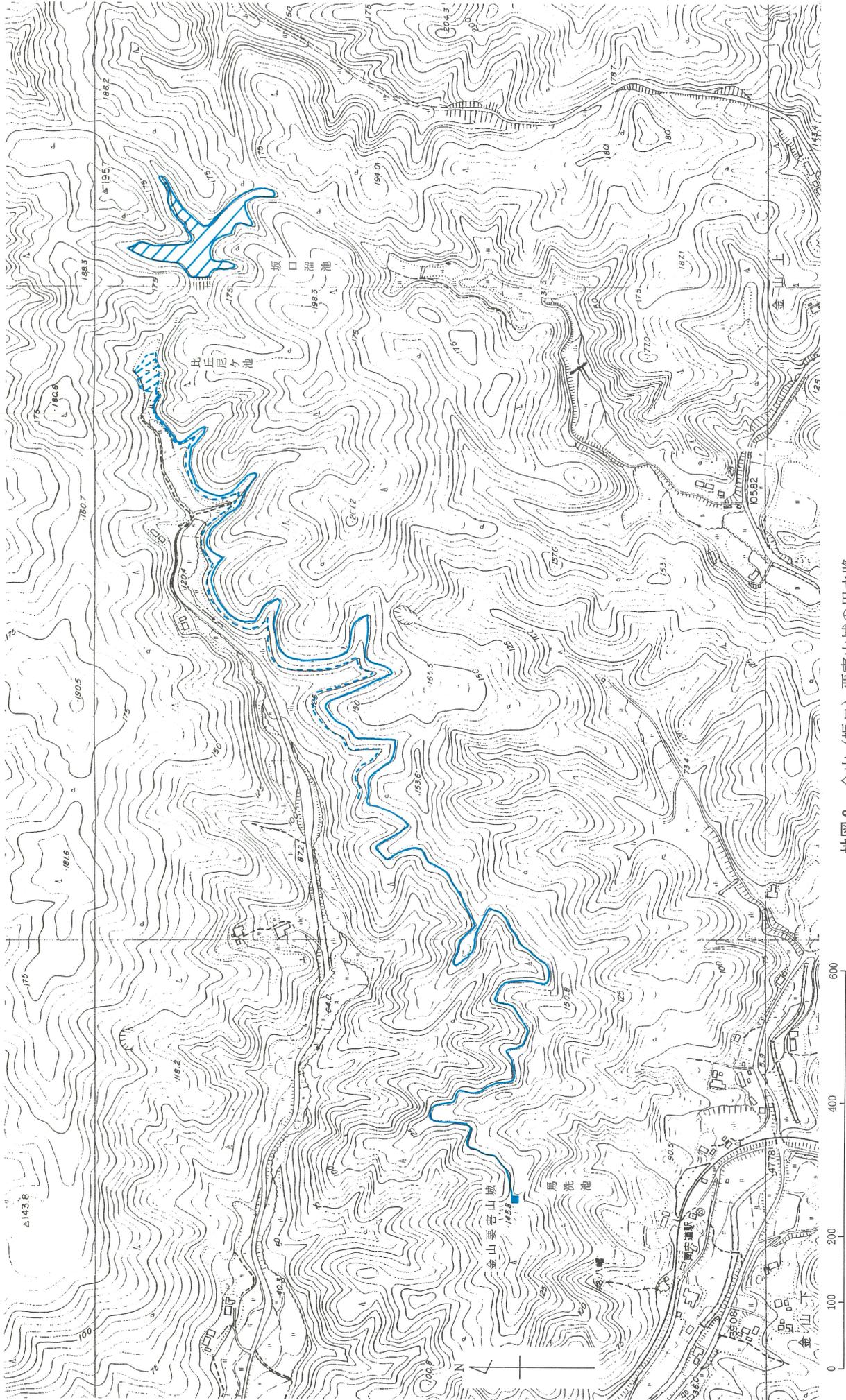
面からの攻撃に対して、両側から横矢^{よこや}をかけて柵形を守るという役割もはたしています。また柵形の上部は、西の北Ⅰ郭側には三角形の小曲輪とそれにつながる連絡路が設けられ、東側は東Ⅰ郭へつながる帯曲輪によって囲まれていますから、上下二段の防御陣で虎口を固めているわけです。城域の奥部に設けられているから可能なことではありませんものの、このような重層的な防御を施された柵形虎口は、ほかの三城にはない特徴といえるでしょう。

4) 水の手

長期の籠城戦^{ろうじょうせん}を考えなくても、山城にとって水源^{みず}（水の手）がいかに大切かは申すまでもありません。したがって、最初から水の手を考えて地取りをしたはずですが、しかしながら、放棄されて500年以上を経過し、しかも自然状態にかえる途上の山城遺構において、水の手を発見することは縄張り調査においても至難^{しなん}の技^{わざ}といわなくてはなりません。宍道要害山城のように、明瞭^{めいりょう}にそれが残されているほうが稀^{まれ}なのです。

ところが、この金山要害山城には古くからの言い伝えがあります。それは、ぼっか池を水源として比丘尼^{びくに}ヶ池^{せき}で堰を作り、その水を馬洗^{うまあら}い池まで引いて飲み水としていたというものです。今回の調査で、この伝承がほぼまちがいないことが確認されました。

地図2に実線で示したのがその水路跡と考えられる溝^{みぞ}です。山腹を削って約2メートル幅の平坦面を造り、そこへ水路となる溝を掘って



地図2 金山(坂口) 要書山城の用水路



写真6 山腹にのびる水路跡

いったようです。ご覧のように、^{とうこうせん}等高線に沿って山ひだを屈曲してのばされ、馬洗い池まで続いています。地図上で^{けいそく}計測してみますと、2,720メートルを^{はか}測ることができました。

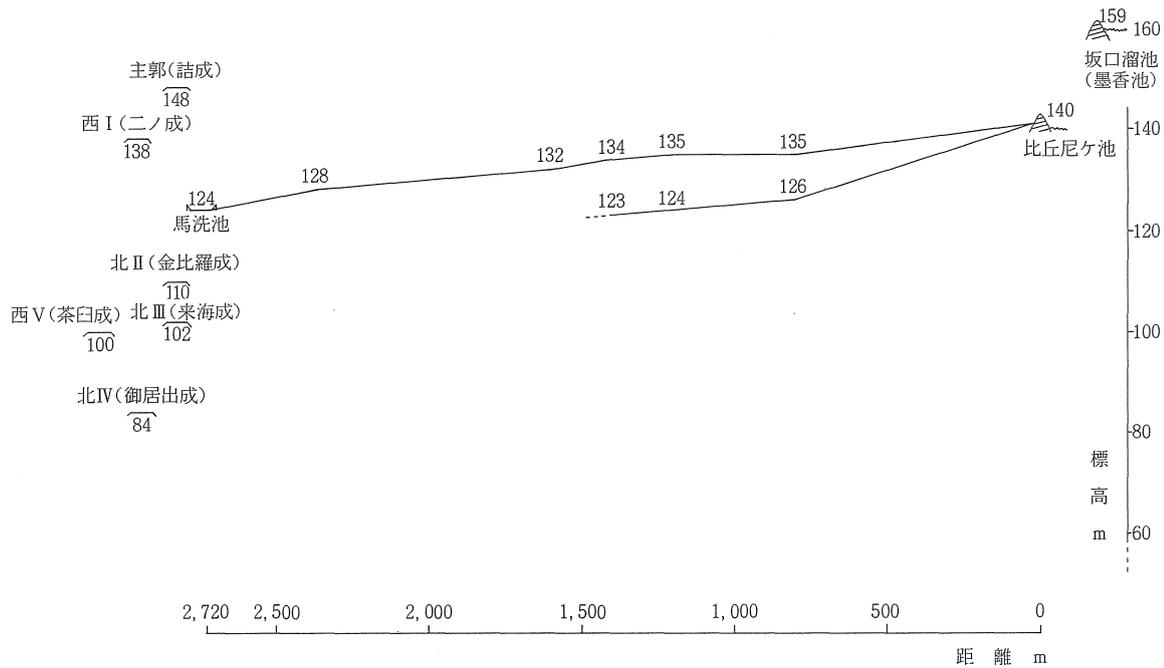
なお点線で示した水路跡は、約1,400メートルほどはたどることができますが、途中でとぎれていてそれ以後は確認できません。付図7をご覧になると、その理由がおわかりいただけると思います。つまり、点線で示した水路跡は、最初に造り始められたものの、そのまま延長しても金山要害山城の下部の曲輪にしか届かないため、わざわざ水路を引く効果が少ないと判断して、途中で放棄されたものと考えられます。そこであらためて、実線の水路の普請を始めたのでしょう。

動員された人々の心境が思いやられるところですが、二重の普請をあえてしたのも、なるべく主郭に近い高所へ水路を導きたかったからにはかなりません。すでに述べたように、主郭と馬洗い池の設けられた通称馬の背との高低差は約24メートルもありますが、主郭の東側直下に位置しているのです。

このように、主郭のすぐ近くにまで水路を引いている例としては、那賀郡金城町の波佐一本松城があります。この山城は、周布川とその支流の長田川の合流点である波佐の中心部に向かって、南方から突き出した尾根の先端部に立地しています。狭い四つの曲輪のそれぞれが孤立的で、閉鎖的な縄張りになっていること、堀切や畝状堅堀が数多くしかも複雑に配されていることなどが特徴とされています。

そしてそれに加えて、長い水路と貯水池をもつことがあげられます。この水路は、長田川の上流の大井谷の大樋口から取水され、水見城の西側をへて波佐一本松城の城域まで続いています。総延長は不明ですが、直線距離にして約2,000メートルもあります。複雑な山腹を迂回しながらですから、はるかに長くなることは確実ですが、注目すべきは稜線を越えてのばされていることです。しかも稜線を越える地点では、水流が激しくぶつかる攻撃面を石積みにして、堅固にしていることに驚かされます。

金山要害山城の場合、水源と伝えられているぼっか池（坂口溜池のことで墨香池とも）は、利水と防災の必要から堰堤が高くされたために、池水面積も広がり貯水量も増加していますから、普請当時の水面



付図 7. 金山(坂口)要害山城用水路縦断面図

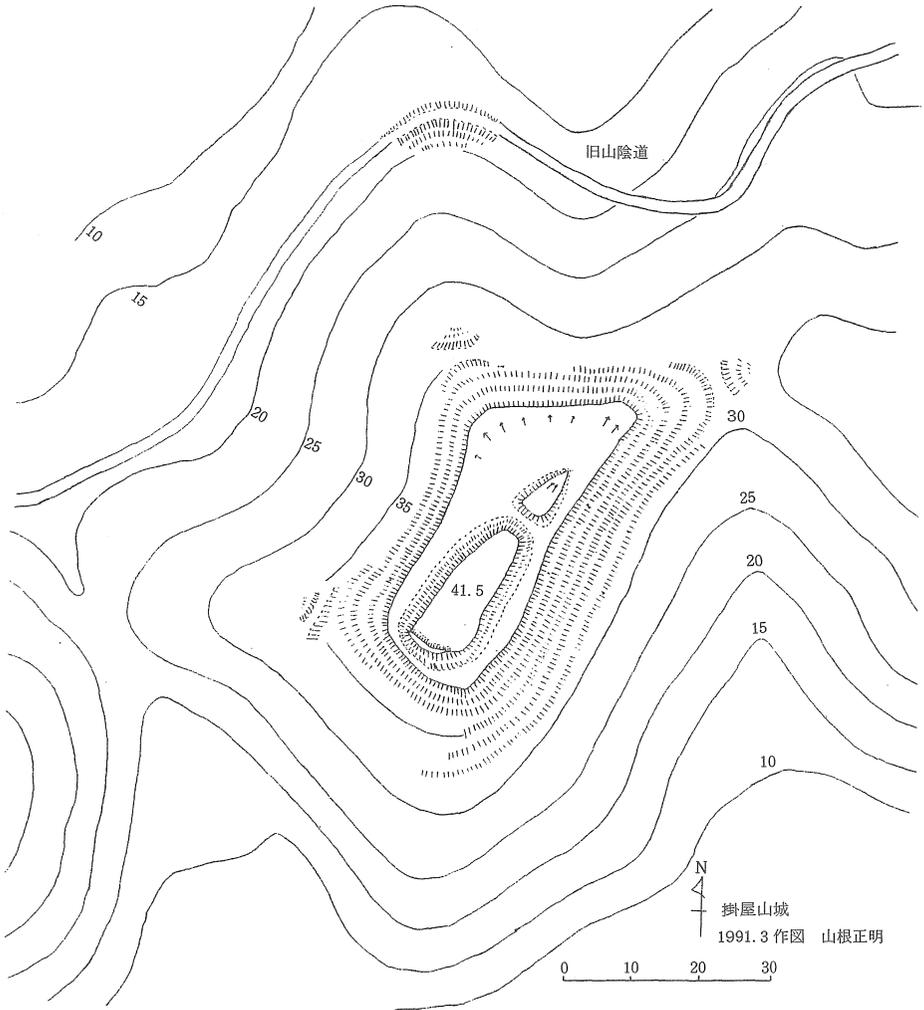
高度がどの程度であったか予想はつきかねます。堰を造ったとされる比^ひ丘^く尼^にヶ池も、堰堤はほとんど取り払われていますが、それを復元して推定してみますと、当時の水面高度は140メートルをいくらか上まわる程度であったと思います。水路の終点となる馬洗い池の標高は124メートルですから、その高低差はたったの16メートルしかないわけです。それに対して始点からの距離は2,720メートルもありますから、水路の平均勾配^{へいきんこうばい}は0.59%程度でしかありません。なお、中断している水路は放棄された地点の標高が123メートルですから、すでに馬洗い池の標高を下まわっており、平均勾配は約1.2%となります。

いずれにしても、大変に精度^{せいど}の高い測量技術^{そくりょうぎじゆつ}をもっていたことがわかります。それとともに、たくさんの小さな尾根筋^{おねすじ}を迂回^{うかい}しなくてはならないという地形上の悪条件にもかかわらず、測量データにしたがって正確に普請を行なえるという、すぐれた土木技術^{どぼくぎじゆつ}をもっていたこともよくわかると思います。波佐一本松城と同様、その技術水準のすばらしさに驚かされるところです。

6. むすびにかえて

1) その他の山城遺構

いずれも要害山とよばれる三つの山城について、縄張り調査による成果を述べてきましたが、実道町内にはこのほかにもいくつかの山城^{やましろ}遺構^{いこう}が確認（地図1 参照）されています。まず、佐々布下には、腰^{こし}



付図8. 掛屋山城縄張り図

曲輪くるわで主郭を取りかこむとともに、その西側に堀切ほりきりを配し、堀切の上方にあたる主郭は土塁で守るという縄張りの遺構（地図1のA）が残されています。高度も低く城域も狭いのですが、旧山陰道が直下を通っていますから、街道かいどうの押さえとして築かれたものと考えられます（付図8 掛屋山城縄張り図参照）。

また佐々布中と荻田おぎたの境の通称城山じょうやま（地図1のB）は、その名のとおり明らかに山城です。主郭もその他の曲輪も削平さくへいはおおまかで、とりたてて特徴といえるような普請はされていませんが、東側の佐々布川の谷に向かって、つまり54号線方向に向かってのびる尾根上には三本の堀切が掘られています。そして、佐々布要害山城の東曲輪群の、北Ⅱ郭の西北側に築かれていた、通路を守るための登り土塁のぼりとほぼ同じ目的の土塁を確認することができます。

なおこの城域の東端で、佐々布川の谷に面した丘陵の上には、収容力の大きい曲輪が設けられています。切崖きりぎしの加工はしっかりしていますから、佐々布要害山城と同様な、繫ぎつなの城として築かれたものと考えられます。

西来待にしきまちの、来待小学校の対岸の丘陵には、一部に土塁をめぐらせた広い平坦面（地図1のC）が残されています。丘陵上ではありますが、付近により高い尾根もありますので遺構の性格が把握しにくいのですが、この地域みょうしゅの名主の居館跡きょかんかもしれません。

来待神社裏手の丘陵の東端にも、曲輪とみてよい平坦面（地図1のD）が残されています。菅原方面からと佐倉や田根方面からの合流点

を押える位置にありますから、山城の地取りとしてふさわしい位置ですが、普請の程度は不十分なものといわざるをえません。

2) 縄張り調査のすすめ

このたびの調査で確認できたのは以上ですが、このほかにも、埋れたままの山城はいくつもあるかと思えます。それを、今後一つずつ明らかにしていかなければなりません、それには多くの地元の方々の協力がぜひとも必要です。山城の調査と研究ほど、^{じもと}地元の^り利や^{とちかん}土地勘が威力を発揮する分野はほかにないといって良からうと思えます。生れ育った土地の声と、もの言わぬ先祖たちの語りかけを聞き取れるのは、地元^に生活している方をおいてないのですから。

金山要害山城についていえば、縄張り調査のほかに、^{でんしょう}伝承の聞き取り調査と周辺^{こあざめい}の^こ小字名の調査が平行して行なわれています。時間をかけた、^{いき}息の長い仕事でした。もちろんそれに先立つ勉強会を、何度ももった後に実施されているわけです。そうした成果の一部や活動記録は、後に^{けいさい}掲載されていますのでご覧いただきたいと思えます。

これらは、福田正吉氏を会長とする「金山要害山を語る会」の会員の皆さんと、教育委員会の稲田信氏の、強い熱意と真剣な努力とによるものです。私が代表してこの「ふるさと文庫」にまとめを載せさせていただきますので、文責は私にあります。実質的な内容は上記の皆さんの熱意と努力の成果にほかなりません。あらためてお礼を申し上げます。

最後にお詫わびとお願いをしておきたいと思います。といたしますのは、宍道氏について述べた部分が少ないことに失望されたであろう点についてです。現在、町内外の古文書を網羅もうらして、宍道町誌の描いた宍道氏像を書き改めるとい作業が進行中であると聞いています。尼子氏と毛利氏うんげいこうぼうせんの間の雲芸攻防戦やまなかしかのすけや、山中鹿介あまこけふっこうせんらによる尼子家復興戦の過程に、宍道氏と宍道地域を置いて、新たな視角から考えてみようとしています。しかもそれが、「金山要害山を語る会」のように、宍道町の多くの人々をまき込んで行なわれようとしている点に、方法としての新しさとともに、地域誌編纂ちいきしへんさんの正しいあり方としても共鳴するものがあります。したがって、そうした試みの途上である現時点において、安易な結びつけをすることにはどうしてもためらいが感じられるからなのです。

もちろん縄張り調査の成果は、その城を取りまく政治的・軍事的状況の中にそれを置いて考えることによって、よりいっそう地域の歴史の解明に役立つものとなります。新たな宍道氏像と宍道の地域像を描くうえに、これまで述べた縄張り調査の成果が資料として生かされるなら、これに過ぎた喜びはありません。

次に、お願いというのは、縄張り調査の継続ということです。すでに述べたように、未調査の山城が、調査の光をあてられ活用されるのを待っています。開発の波がこの地域の山容を変えてしまわないうちに、一刻も早く全面的な調査をする必要があります。

ところで山城の調査研究の方法としては、①縄張り研究のほかに、

②発掘調査による考古学的研究法があります。また、③古文書や文献からする文献史学的研究法、あるいは④歴史地理学という地理学的方法による山城研究もあるわけです。ただ、遺構に即して、軍事施設である山城そのものに視点をすえて行なわれるのは、縄張り研究と考古学的研究の二方法だといわざるをえません。

このうち、遺構の精密な復元という点からは、考古学的な発掘調査にまさる方法はないといってよいでしょう。ただ、山腹をふくめて山城全体を発掘調査することなどはまず出来ないのが現状です。縄張り研究の長所は、こうした考古学的研究の弱点を補完するという側面にも認められるのです。

ところで縄張り研究とよんだり、そもそも調査とか研究というとはなく仰々しくなってしまうのですが、これまでに述べたとおりの方法をさすわけです。つまり、①城郭を構成する堀切や曲輪・土塁などの遺構を、なるべくいねいに表面観察することによって縄張り図を作成し、これを基礎として築城プランやその山城の特性を明らかにしようとするわけです。ですから、②山城全体を、山腹斜面にいたるまでいねいに調査することによって、築城者の意図を正確に読み取り、縄張り図に表現することが大切になります。ともあれこの方法は、③山城の位置や城域を確定したり、文化財としての重要性を多くの人々にわかってもらって、遺跡保存のための基礎研究とするという性格もっています。そして、④表面観察をするだけで遺構をまったく破壊しませんから、ほかの調査者や後世の研究者による再確認や再検討が

可能である点が良いところなのです。

要するに、誰にでもいつでもできる調査方法なわけですから、これを機会に、ぜひ埋もれたままの山城の調査に着手していただきたいと思います。そうしていただくことで、縄張り図も数多く集められるはずですし、私の未熟な縄張り図や遺構の読み取りも訂正されることでしょう。そして、おのずと地域の歴史の理解が豊かになっていくことと思います。

くり返して申し上げますが、生れ育った土地の声と、もの言わぬ遠い先祖たちの語りかけを聞き取れるのは、地元に住んでいらっしゃる皆さんがたをおいてほかにはないのですから。

附・金山要害山を語る会とその活動

金山要害山を語る会

1. はじめに

地域に残る文化遺産を自分たちの手で大切にしていこうと、「金山要害山を語る会」が結成されたのは昭和63年5月のことでした。以来、学習会や現地見学をとおしてこの古城のもつ重要性を改めて確認することができましたし、ともすればその存在すら忘れられかけていた古い伝承についても老若男女交えて語り合うことができました。

この場を借りて、活動の成果である金山（坂口）要害山周辺に残る伝承の記録と、会の活動記録を紹介してみましょう。

ところで、私たちの会は多くの賛同者によって作られ、育てられたものですが、とりわけ平田高校の山根正明先生には多くの助言と現地指導をいただきました。感謝申し上げます。

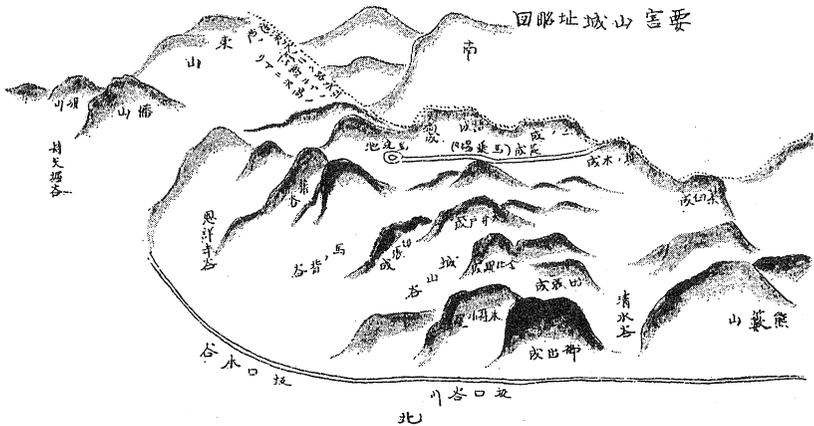
2. 金山（坂口）要害山にまつわる言い伝え

1) 水路の話

金山（坂口）要害山では要害山の西側にある馬洗池^{うまらいけ}まで飲料用の水を引いていたと伝えられています。これはほっか池を水源とし、比丘尼^{びくに}池で堰^{せき}をつくり、そこから要害山までを水路で結んだもので、今でも水路の跡が残っています。

ほっか池は「墨香池」とも表し、その昔、菅原道真すがはらみちざねがこの池で筆を洗ったことからこの名がついたとも伝えられています。昭和初期に治水ダムができたため、池の面積は昔より広がっていますが、坂口の谷の最も奥にあるこの池が水路の水源地だったようです。

比丘尼ヶ池というのは川を塞ぎとめて造られた人造湖だったようですが、現在は堤が取り払われて、池とはなっていません。要害山に引かれた水路はここから始まったと伝え、現在も水の取入れ口と伝える窪地くぼちが残っています。比丘尼ヶ池と呼ばれるようになったのは、要害山に水を引いていた戦国時代にこの池で一人の比丘尼みずもり（僧尼）が水守をしていたからとも、また一説によると要害山が戦に巻き込まれたおり、敵の兵が水路を閉ざすために水守の



金山（坂口）要害山古図（宍道町誌より、製作年代不詳）

比丘尼を殺してしまったという悲話にちなむからだともいいます。

水路跡と思われる溝は2本残っており、一本は比丘尼ヶ池から要害山まで続きますが、もう1本は途中で切れています。これは最初の溝づくりが失敗だったようで、途中で作り直したからだといえます。

水路作成にあたっては夜に提燈ちようちんを水路脇に並べて、水平を計りながら工事を進めていったという言い伝えも残っています。

2) 馬洗い伝説

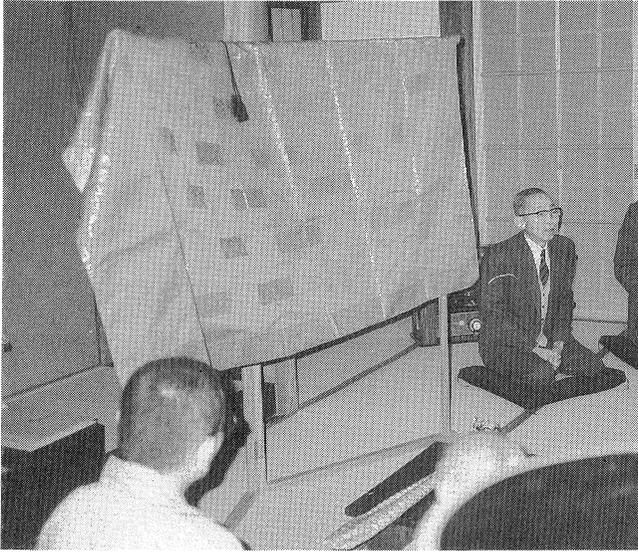
要害山が兵糧攻ひようろうぜめにあったとき、城では水がなくなり困りはてていましたが、敵にそのことを知られてはなりません。苦肉の策として敵によく見えるところで馬に白米をかけ、水はまだ豊富にあるとみせかけたといえます。一説によると、要害山の場合は小豆あずきに灰を混ぜて馬にかけたのだともいいます。

3) 白樫伝説

要害山から坂口地区にのびる谷の一つを樫谷つばきたにといえます。言い伝えによると、城が落ちる際に財宝をこの谷に埋め、ふたたび城に戻ってくるときの目印に白樫の木を植えておいたということなのです。

4) 小豆屋あずきやに預けられた姫の話

宍道氏第九代の宍道政慶まさよしは天正10年(1582)に金山要害山から鷲ヶ巣城す(出雲市)に移ったと伝えられます。後に文録ぶんろく、



小豆澤良久氏より姫の話を書く（豊龍寺、袈裟と太刀を前に）

慶長の役に軍功をたてたと伝えられるものの、主君である毛利氏が関ヶ原の合戦の後、長州に移封されたことから、これに従って萩に移り住みます。

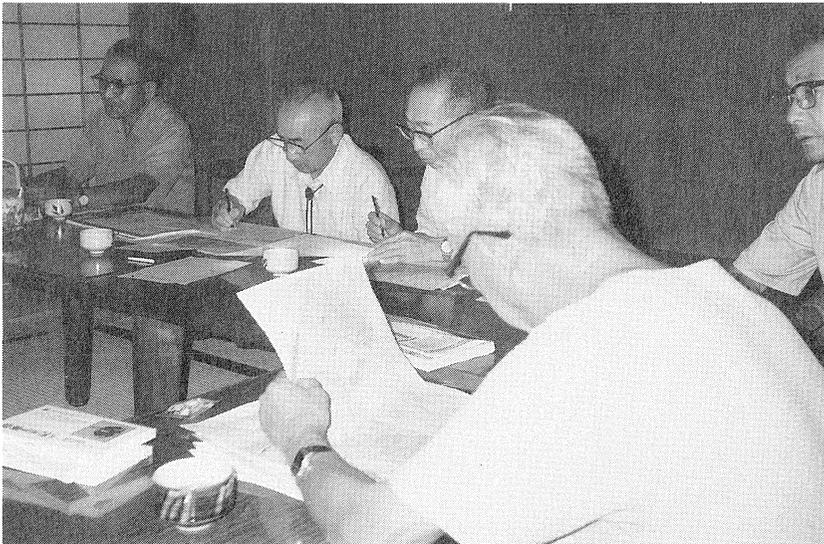
その萩移封の折、政慶には3才の一人娘がいましたが、これを連れていくには忍びないとして、宍道の豪家小豆屋（現当主小豆澤良久氏）に密かに逃れさせ養育を委託しました。その際、証拠の品として「太刀」一振と金欄の「打掛」を添えとどけたといひます。

そのころ小豆屋には3人の娘がいましたが3人とも嫁にだし、預かった城主の娘を世継ぎとし、婿に小豆屋と同祖といわれる「同

道」(現当主小豆澤弘安氏)より迎え、同家を継がしめたといひます。婿は小豆屋35世六左衛門と称し、城主の娘の名前は不明であるものの、延宝^{えんぼう}六年(1678)十一月十二日に没し、法名を月甫^{げっぽ}妙心大姉^{みょうしんたいし}と号したと小豆澤家では伝えています。

なお、城主の娘が成人したおりに小豆屋では打掛を袈裟に仕立て直し、宍道氏の菩提寺といわれる豊龍寺^{ほうりゅうじ}に寄進したといひ、同寺に現存する「宍道伊予守遺物九条大袈裟」^{しんじいよのかみいぶつくじょうおおげさ}がそれだと伝えられています。

また、太刀のほうも「三条宗近銘太刀」^{さんじょうむねちかめいたち}として小豆澤家に伝えられています。



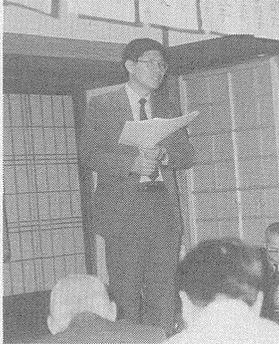
金山要害山を語る会での学習会

3. 会の活動記録（昭和63年～平成元年の活動より）

- 昭和63年 5月12日 「語る会」発会式、現地見学（要害山）
7月11日 学習会
9月11日 学習会
11月5日 文化財めぐり、現地見学（要害山）
11月23日 現地見学（豊龍寺、要害山周辺の史跡）
平成元年 6月4日 要害山詰成（山頂）の草刈り（坂口側）
8月20日 要害山登山道の草刈り（金山側）
9月3日 学習会
12月17日 学習会、講演会

（要害山詰成周辺の整備は「要害山整備会」によって逐次行なわれています。）

著 者 紹 介



やまねまさあき
山根正明
(金山要害山を語る会で)

1947年：八東郡東出雲町に生れる

1970年：島根大学文理学部文学科卒業

現 在：川本高校・浜田高校をへて1985年より
平田高校勤務

専 攻：日本中世史

中世村落と耕地・農民のあり方について
の探究から、国人の所領支配の中核
たる中世城郭の調査・研究へ発展。

著書・論文：『江津市誌』（共著）、『竹矢郷土
誌』（共著）、「石見国人久利氏の成長
過程について」『山陰史談』2号、「国

人所領の復元的考察」『山陰－地域の歴史的な性格』、「出雲における毛利氏の
山城について」『山陰史談』22号。

宍道町ふるさと文庫 5

宍道町の山城

1991年3月31日第一刷発行

1992年10月1日第二刷発行

著 者 山 根 正 明
発 行 宍道町教育委員会
八東郡宍道町大字昭和1番地
印 刷 柏木印刷有限会社
松江市国屋町452-2

